本庄市埋蔵文化財調査報告書　第24集

長沖古墳群 Ⅸ

（ながおきこふんぐん）

－長沖172号墳・長沖173号墳・長沖30号墳の調査－

児玉南土地区画整理事業発掘調査報告書２

２０１１

本庄市教育委員会

序

埼玉県北部の本庄市に所在する長沖古墳群は、埼玉県の重要遺跡に選定され、埼玉県を代表する古墳群の一つとして、全国的にも著名な遺跡と言えます。その古墳の数は、現在までのところ200基近くが明らかになっていますが、本来はその倍以上の古墳が存在した大古墳群であったと言われています。

この長沖古墳群の一帯も、かつては広大な桑原の中に大小様々な円丘があちらこちらに多数群在するような、のどかな農村的景観を醸しだしていましたが、長年にわたる畑の開墾を主とした開発によって多くの古墳が徐々に削平され、近年では古墳群内を通る環状１号線の開通や児玉南土地区画整理事業などを契機とした大小様々な開発が進行し、現在では多くの建物の間に古墳が埋没して点在するような、都市的景観に急速に変化しつつあります。今後ますます増え続ける様々な開発から、これらの古墳を保護し、後世に残し伝えていくためにも、歴史的景観を含めた新たな文化財保護の構想を考えていかなければならないでしょう。

本書は、児玉南土地区画整理事業に伴って、平成６年度に調査した賀家ノ上南地区と平成18年度に調査した中之道地区Ｂ地点の発掘調査の成果を記録したものです。賀家ノ上南地区の調査では、これまで知られていなかった古墳の周溝跡が２基検出され、中之道地区Ｂ地点では　墳丘が残る長沖30号墳の大量の川原石を緻密に積み上げて造られた石室の内容を明らかにするなど、いずれも貴重な成果を上げることができました。

本書が、学術的な研究資料としてはもとより、地域の文化財の保護や啓発・普及のため、学校教育や生涯学習の場において、多くの方々に広くご活用いただければ幸甚に存じます。

最後に、現地の発掘調査から整理・報告書の刊行まで、文化財に対する深いご理解とご協力を賜りました関係各位に、心から感謝申し上げます。

平成23年　３月

本庄市教育委員会
教育長　茂木孝彦

例　　言

1．　本書は、埼玉県本庄市児玉町児玉字賀家ノ上と金屋字中之道に所在する、埼玉県選定重要遺跡「長沖古墳群」の発掘調査報告書である。

2．　長沖古墳群に関する発掘調査報告書は、これまでに児玉町教育委員会・埼玉県埋蔵文化財調査事業団・本庄市教育委員会・本庄市遺跡調査会で刊行されており、本書は長沖古墳群の９冊目の報告書になることから、書名を『長沖古墳群Ⅸ』とした。

3．　発掘調査は、児玉南土地区画整理事業に伴う事前の記録保存を目的として、賀家ノ上南地区が平成６年度、中之道地区Ｂ地点が平成18年度に実施した。

4．　発掘調査は、賀家ノ上南地区を旧児玉町教育委員会が、中之道地区Ｂ地点を本庄市教育委員会が実施し、その調査担当には前者を徳山寿樹と大熊季広が、後者を恋河内昭彦があたった。

5．　本書中で使用した地図は、国土地理院発行の２万５千分の１、本庄市発行の２千５百分の１の都市計画図である。

6．　出土遺物の実測及び観察表の作成は、新井嘉人の協力を得て、恋河内が行った。

7．　出土遺物観察表に記した記号は、以下のとおりである。
　Ａ－法量（単位は㎝、カッコは推定）、Ｂ－成形、Ｃ－整形・調整、Ｄ－胎土、材質、Ｅ－色調、Ｆ－残存度、Ｇ－備考、Ｈ－出土層位・位置

8．　本書に掲載した写真は、遺構を各調査担当者が、遺物は磯崎勝人が撮影した。

9．　本書の執筆及び編集は、恋河内が行った。

10．　発掘調査から本書刊行にあたって、下記の方々や機関からご教示・ご協力を賜った。記して感謝します。
　赤熊　浩一、荒川　正夫、岩瀬　　譲、江原　昌俊、大谷　　徹、金子　彰男、加部　二生、
　坂本　和俊、佐々木幹雄、篠崎　　潔、外尾　常人、田村　　誠、富田　和夫、中沢　良一、
　長滝　歳康、中村　倉司、丸山　　修、山崎　　武
　埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団

発掘調査組織

（平成６年度：賀家ノ上南地区）

主 体 者　児玉町教育委員会
　　教 育 長　冨丘　文雄
事 務 局　社会教育課長　大塚　　勲
　　課 長 補 佐　関根　安男
　　〃　岩上　高男
　　社会教育係長　清水　　満
　　主　　任　鈴木　徳雄
　　〃　田島　賢二
　　主　　事　倉林美恵子
　　〃　恋河内昭彦
　　〃　徳山　寿樹（調査担当）
　　主 事 補　大熊　季広（　〃　）

（平成18年度：中之道地区Ｂ地点）

主 体 者　本庄市教育委員会
　　教 育 長　茂木　孝彦
事 務 局　事務局長　丸山　　茂
　　文化財保護課
　　課　　長　前川　由雄
　　課長補佐兼文化財保護係長
　　増田　一裕
　　課長補佐兼埋蔵文化財係長
　　鈴木　徳雄
　　主　　査　太田　博之
　　主　　査　恋河内昭彦（調査担当）
　　主　　事　松澤　浩一
　　主　　事　松本　　完
　　臨時職員　的野　善行

整理・報告書刊行組織

（平成22年度）

主 体 者　本庄市教育委員会
　　教 育 長　茂木　孝彦
事 務 局　事務局長　腰塚　　修
　　文化財保護課
　　課　　長　金井　孝夫
　　副参事兼課長補佐
　　鈴木　徳雄
　　埋蔵文化財係
　　係　　長　太田　博之
　　主　　査　恋河内昭彦（整理担当）
　　主　　査　大熊　季広
　　主　　任　松澤　浩一
　　主　　任　松本　　完
　　臨時職員　的野　善行

目　　次

序

例　言

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章　長沖古墳群の概要 …… 3

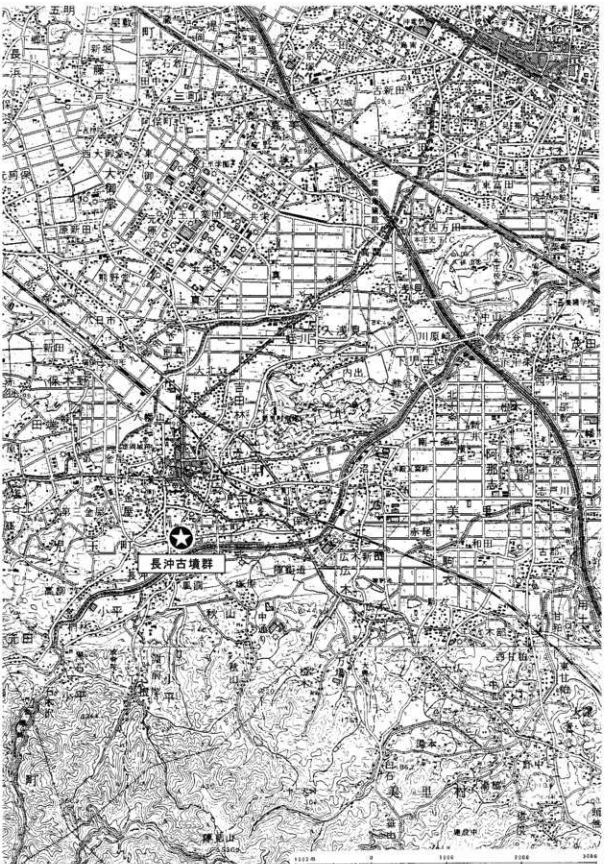
第Ⅲ章　賀家ノ上南地区の発掘調査 …… 4
第１節　調査地点の概要 …… 4
第２節　検出された遺構と遺物 …… 6
１．古　墳　跡 …… 6
長沖172号墳 …… 6
長沖173号墳 …… 8
２．土　　坑 …… 9
第１号土坑 …… 9

第Ⅳ章　中之道地区Ｂ地点の発掘調査 …… 11
第１節　Ｂ地点の概要 …… 11
第２節　検出された遺構と遺物 …… 12
１．古　　墳 …… 12
長沖30号墳 …… 12
２．土　　坑 …… 30
第１号土坑 …… 30
第２ａｂ号土坑 …… 30
第３号土坑 …… 31
第４号土坑 …… 31
第５ａｂ号土坑 …… 31
第６号土坑 …… 33
第７号土坑 …… 33
第８号土坑 …… 33
第９号土坑 …… 33
３．調査区内出土の縄文土器 …… 34

第Ⅴ章　ま　と　め …… 40

＜参考文献＞ …… 42

写　真　図　版



第１図　遺跡の位置

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯

本庄市児玉町の児玉・長沖・金屋・高柳の一部にかかる広大な畑地帯に広がる長沖古墳群は、埼玉県の重要遺跡にも選定されており、児玉地方はもちろんのこと、埼玉県を代表する古墳群の一つとして、全国的にも著名な遺跡である。この長沖古墳群が立地する畑地は、かつて養蚕が盛んであった時代はそのほとんどが桑畑として利用されていたが、古墳群の東側が旧児玉町の市街地に接していることもあって、高度経済成長期には古墳群内にも徐々に宅地化が進行していた。

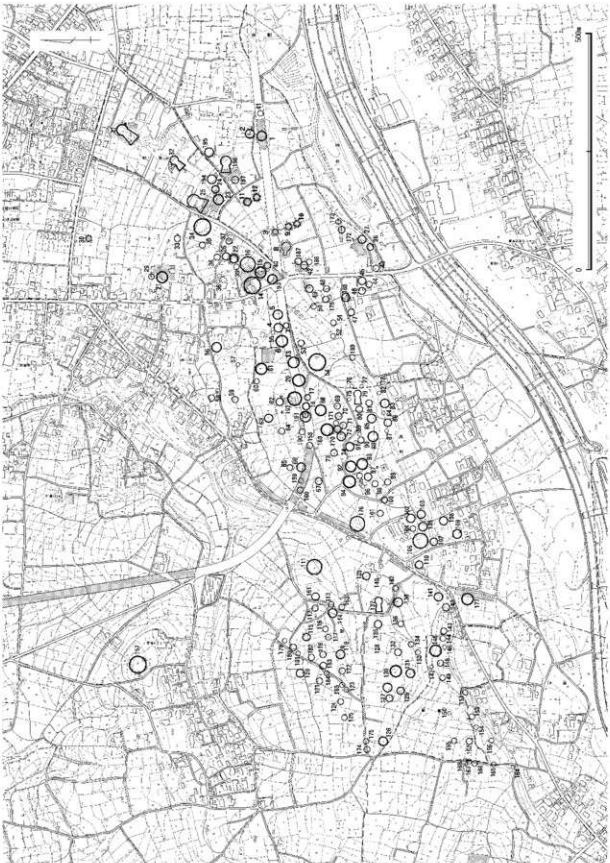
このような時代の推移による周辺の住環境の変化に応じて、昭和48年に長沖地区が第一種住宅専用地域に指定され、昭和49年度には現在の児玉支所(旧児玉町役場)前から小平に通じる野上・児玉線(県道187号線)より東側の約37haを対象とした「児玉南土地区画整理事業」が計画された。これに伴い児玉町と埼玉県教育委員会で事業地内の文化財の取り扱いについて協議が行われ、保存状態のよい前方後円墳とされる長沖31号墳と長沖32号墳の２基は、児童公園として現状保存し、他の古墳は発掘調査を実施して記録保存することになった(菅谷他1980)。

発掘調査は、昭和51年から昭和54年の五次にわたって一部墳丘が現存する古墳を主体に実施され、その成果は昭和55年に児玉町教育委員会により報告書が刊行されている(菅谷他1980)。その後、諸般の事情で事業は遅延し、事業地内を通って市街地を迂回する都市計画道路の環状１号線建設が優先して行われていた。平成になってバブル景気による都心部の狂乱的な地価高騰のあおりを受け、不動産売買や住宅建設に対する関心が高まる中で事業が本格的に再開され、年度毎の工事計画に合わせて調整しながら、発掘調査も引き続き行われるようになった。

今回報告する賀家ノ上南地区は、事業地内の区画道路建設に伴い実施したもので、古墳の周溝跡が２基調査されている。中之道地区Ｂ地点は、街区内の造成工事に伴って実施したもので、記録保存の対象として事業地内に残っていた墳丘が現存する最後の古墳の調査であった。

調査期間は、賀家ノ上南地区が、平成６年10月11日から12月９日まで、中之道地区Ｂ地点が平成18年５月22日から９月12日までである。

（長沖古墳群児玉南土地区画整理事業地内の現況）



第２図　長沖古墳群古墳分布図

第Ⅱ章　長沖古墳群の概要

埼玉県選定重要遺跡の長沖古墳群は、本庄市児玉町の市街地の南側に位置する。その範囲は、小山川(旧身馴川)に沿って、西側の標高125mを測る丘陵部から東側の丘陵先端部下に広がる標高101m付近の氾濫原まで、その距離は東西約1700m、幅は南北約500mの帯状に分布している(第２図)。

長沖古墳群の古墳の数は、1980年の報告(菅谷他1980)では墳丘が消滅した古墳も含めて157基を確認していたが、その後の発掘調査や試掘・確認調査の進展により、現在では197基の存在が明らかになっている。古墳群内の前方後円墳も、1980年当時では伝承による長沖110号墳を含めて６基の存在が知られていたが、その後昭和59年(1984年)に農道改良舗装工事に伴う発掘調査で、西側の高柳地区に所在する長沖137号墳が前方後円墳であることが判明し、平成22年(2010年)に本庄市教育委員会の試掘調査で、賀家ノ上地区に新たな前方後円墳と推測される古墳が１基(長沖196号墳)確認されており(第10図)、前方後円墳の数も現在では８基の存在が知られている。

これらの古墳は、児玉から秩父に通じる県道76号線(児玉金沢秩父線)に沿って、丘陵内に深く湾入する谷により地形的に東西に二分される。かつては、この谷を境にして東側を長沖古墳群、西側を高柳古墳群と呼称し、これらを総称して「長沖・高柳古墳群」と呼ぶことが提唱されたが(菅谷他1980)、両者は古墳の分布からも連続する一つの古墳群として捉えられ、またこの古墳群の個々の古墳の名称として最も一般的に使われている「長沖・高柳古墳群分布図」(菅谷他1980)の古墳番号が通し番号で付けられていることから、それぞれの古墳番号に混乱を生じ、煩雑になることが予測されたため、現在では一般的に両者を総じて長沖古墳群と呼称し、東側を長沖支群、西側を高柳支群と呼んでいる。この両支群内には、小規模な谷が高柳支群で東西方向に、長沖支群では北東方向に幾筋も入り込んでおり、その小規模な谷に沿って延びる丘陵上や丘陵下の氾濫原に続く尾根筋上及び小山川沿いの段丘壁上に、古墳が列状に並ぶ複数の小支群に分けることが可能である。

本古墳群の形成は、前期古墳は未確認であるが、中期中頃から後半には確実に古墳が築造されはじめている。中期の古墳は、高柳支群の北側に単独で存在する長沖157号墳(埼玉県教育委員会1994)、長沖支群東側の長沖14号墳と長沖34号墳がある(菅谷他1980)。これらの古墳は、いずれも５世紀中頃から後半のＢ種ヨコハケ調整の円筒埴輪をもつ墳丘直径30m前後の円墳と推測されるもので、長沖157号墳は有黒斑の埴輪が出土し(日高1994)、長沖14号墳は黒斑あるいは焼きむらのある埴輪や生野山９号墳の埴輪と類似する無黒斑の埴輪が出土している(菅谷他1980)。後期の６世紀になると、墳丘直径10m～20m程度の円墳の他に、群構成の核的古墳として30m～40m級を主とする複数系列の前方後円墳がおそらく継続的に７～８基築造されている。その後、古墳群は７世紀代まで古墳群域をあまり拡大させず、古墳間の隙間を埋めるように、充填的に小規模な円墳が多数築造され続けている。

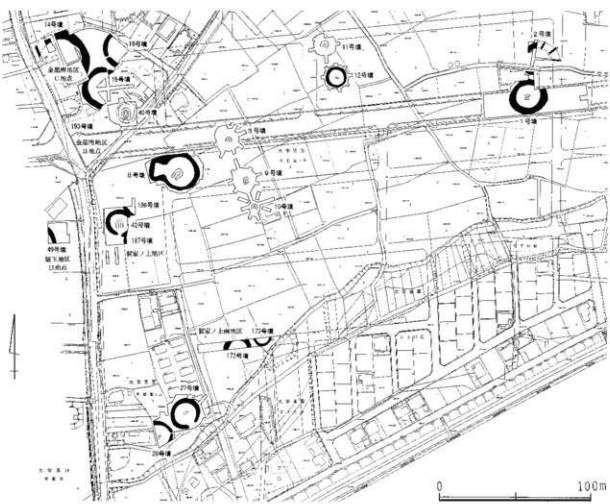
古墳の主体部については、中期古墳は不明ながら、後期の６世紀前葉には長沖12号墳や長沖27号墳など、竪穴式系石室の礫郭や箱式石棺が見られ、６世紀中頃までには長沖４号墳・長沖13号墳・長沖28号墳のように、短冊形の袖無型横穴式石室が導入される。そして、６世紀後葉には長沖23号墳や長沖８号墳のような多様化した両袖型横穴式石室が出現し、６世紀末以降には川原石による模様積みが特徴的な両袖型の胴張横穴式石室が主流になって、以後７世紀を通じてこの石室の小型化と石室構築の省力化や形骸化が進行する(大谷1999)。

第Ⅲ章　賀家ノ上南地区の発掘調査

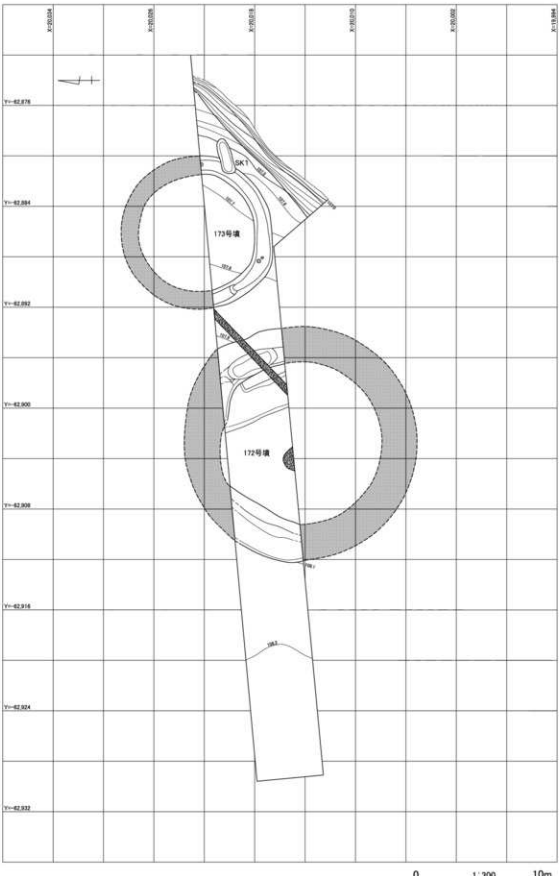
第１節　調査地点の概要

賀家ノ上南地区は、長沖古墳群の南側にあたり、小山川(旧身成馴川)の浸食によって形成された河岸段丘壁付近に位置する。南西側約50mの同じ段丘壁上には、墳丘径約16mの円墳で竪穴系の礫槨や無袖型横穴式石室を主体部に持つ、長沖27号墳と長沖28号墳があり(菅谷他1980)、段丘壁上に古墳が列状に並ぶ様相が窺える。

調査区内からは、古墳跡２基(長沖172・173号墳)と後世の土坑１基・道状遺構１が検出されている。古墳跡は、いずれも墳丘や主体部はすでに削平されており、周溝の一部が検出されただけである。大熊氏の調査によれば、明治初期の地籍図に長沖172号墳は「塚」としてその地割りが認められるが、長沖173号墳は当時の地籍図に古墳の痕跡は認められないようで(大熊2003)、長沖173号墳についてはかなり早い段階で削平されていたようである。墳形は、いずれも円墳を基調にすると考えられ、規模は長沖172号墳が墳丘径約13m、長沖173号墳が約9.5mである。遺物は比較的少なく、長沖172号墳は円筒埴輪の破片が少量、長沖173号墳は土師器坏が２個体周溝内から出土しただけである。時期は、出土した遺物から長沖172号墳が６世紀前半頃、長沖173号墳が５世紀末～６世紀初頭頃と考えられる。



第３図　賀家ノ上南地区周辺の発掘調査地点



第４図　賀家ノ上南地区全体図

第２節　検出された遺構と遺物

１．古　墳　跡

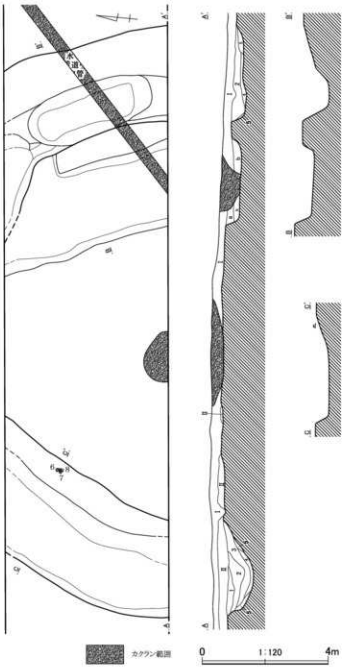
長沖172号墳（第５図、図版３）

調査区の中央付近に位置し、東側約３ｍには長沖173号墳が近接している。古墳東側の墳丘部分と周溝の一部を、近世以降の道状遺構と現代の水道管によって切られている。古墳の墳丘や石室等の主体部は、すでに削平されており、調査区内では墳丘の東側部分と西側の周溝のみが検出されている。

墳形は、調査区内で検出された部分から推測すると、やや不整ながら円墳を基調とするものと思われる。規模は、周溝内径13ｍ程度・周溝外径19ｍ程度と推測される。

周溝は、東西両側の周溝とも上幅が３ｍ前後の均一な形態で、確認面からの深さは東側の周溝が32㎝～38㎝、西側の周溝が80㎝～86㎝ある。東側の周溝底面には、長さ4.07ｍ、幅1.87ｍ、深さ38㎝の比較的規模の大きなコーナー部の丸みが強い長方形を基調とする土坑状の掘り込みが見られるが、その性格は不明である。

出土遺物は、周溝の覆土中から円筒埴輪と形象埴輪の脚部（No５）の可能性が考えられる破片が出土してい



第５図　長沖172号墳

長沖172号墳周溝土層説明

第Ⅰ層：現耕作土。

第Ⅱ層：暗茶褐色土層（小礫(～1.5㎜)を中量含み、礫(～2cm)を少量含む。全体に硬くしまっており、粘性若干有り。）

（道状遺構）

第ａ層：明褐色土層（礫粒(～0.5㎜)・小礫(～2㎜)を多量に含み、礫(～4cm)を微量含む。しまりは硬く、粘性低い。）

第ｂ層：暗褐色土層（砂粒(～0.5㎜)・小礫(～2cm)を中量・礫(～5cm)を少量、Ａ軽石を含む。しまりはやや硬く、粘性やや有り。）

（長沖172号墳）

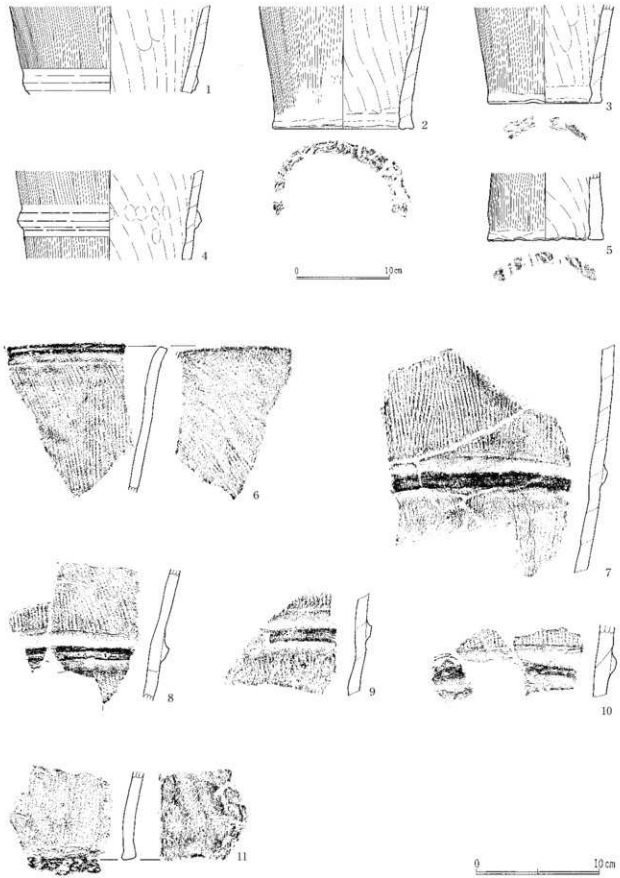
第１層：暗褐色土層（小礫(～5㎜)・礫(～1.5cm)を少量含む。しまりは有るが、やや軟らかく、粘性強い。）

第２層：暗褐色土層（第2層に準ずるが、砂粒(0.5㎜)・小礫(～5㎜)・礫(～4cm)を多量に含む。しまりは有るが、やや軟らかく、粘性強い。）

第３層：暗褐色土層（第2層に準ずるが、砂粒(～0.5㎜)・小礫(～5㎜)・礫を中量含む。しまりは有るが、やや軟らかく、粘性強い。）

第４層：明褐色土層（小礫(～3㎜)を中量・礫(～3cm)・礫粒(～0.5㎜)を微量含む。しまりは硬く、粘性やや有り。）

第５層：明褐色土層（第3層に準ずるが、礫(～4cm)がやや多い。）



第６図　長沖172号墳出土遺物

第172号墳出土遺物観察表

1	円筒埴輪	A．残存高9.4、最大幅(21.0)。B．粘土紐積み上げ。C．外面ハケの後凸帯上ヨコナデ、内面指ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．1/4破片。G．ハケは４本／１cm。H．周溝内。
2	円筒埴輪	A．残存高13.1、基部径13.2 ～ 15.0。B．粘土紐積み上げ。C．外面ハケ、内面指ナデ。基部内外面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－淡黄茶褐色。F．基部3/4。G．ハケは４本／１cm。H．周溝内。
3	円筒埴輪	A．残存高10.5、基部径(12.2)。B．粘土紐積み上げ。C．外面ハケ、内面指ナデ。基部内外面ナデ。D．片岩粒、赤色粒。E．内外－茶褐色。F．基部1/4破片。G．ハケは４本／１cm。H．周溝内。
4	円筒埴輪	A．残存高9.4、最大幅（19.8）。B．粘土紐積み上げ。C．外面ハケの後凸帯上ヨコナデ、内面指ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．1/4破片。G．ハケは４本／１cm。H．周溝内。
5	埴輪	A．残存高7.2、基部径（12.2）。B．粘土紐積み上げ。C．外面ハケ、内面指ナデ。基部内外面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．基部1/4破片。G．ハケは４本／１cm。形象埴輪の脚部の可能性あり。H．周溝内。
6	円筒埴輪	B．粘土紐積み上げ。C．内外面ハケ。口唇部内外面ヨコナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．口縁部破片。G．ハケは４本／１cm。H．周溝内。
7	円筒埴輪	B．粘土紐積み上げ。C．外面ハケの後凸帯上ヨコナデ、内面指ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．外－明茶褐色、内－淡黄茶褐色。F．破片。G．ハケは４本／１cm。H．周溝内。
8	円筒埴輪	B．粘土紐積み上げ。C．外面ハケの後凸帯上ヨコナデ、内面ハケ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．破片。G．ハケは４本／１cm。透孔をもつ。H．周溝内。
9	円筒埴輪	B．粘土紐積み上げ。C．外面ハケの後凸帯上ヨコナデ、内面指ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡黄茶褐色、肉－暗燈褐色。F．破片。G．ハケは４本／１cm。H．周溝内。
10	円筒埴輪	B．粘土紐積み上げ。C．外面ハケの後凸帯上ヨコナデ、内面指ナデ。D．片岩粒、赤色粒。E．内外－茶褐色。F．破片。G．ハケは４本／１cm。H．周溝内。
11	円筒埴輪	A．B．粘土紐積み上げ。C．外面ハケ、内面指ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．基部破片。G．ハケは４本／１cm。H．周溝内。

る。この中の円筒埴輪は、ほぼ同一時期と考えられるもので、いずれも類似した刷毛状工具を使って製作されており、本古墳に樹立されていたものが、破片になって周溝内に落ち込んだものと考えてよいであろう（第６図、図版６）。

本古墳跡の時期は、出土した円筒埴輪の特徴から、６世紀前半頃と考えられる。

長沖173号墳（第８図、図版４）

調査区の東端に位置し、西側約３ｍには長沖172号墳が近接している。周溝東側の一部を、第１号土坑に切られている。

墳形は、調査区内で検出された部分から推測すると、比較的整った円墳を基調にすると思われる。規模は、周溝内径9.5m・周溝外径13.4mを測り、これまでに調査された長沖古墳群の古墳の中では、小型の部類に属する。

周溝は、上幅が1.45mの比較的均一な形態で、壁は内外とも緩やかに立ち上がっている。底面は広く平坦で、確認面からの深さは30cm～47cmある。

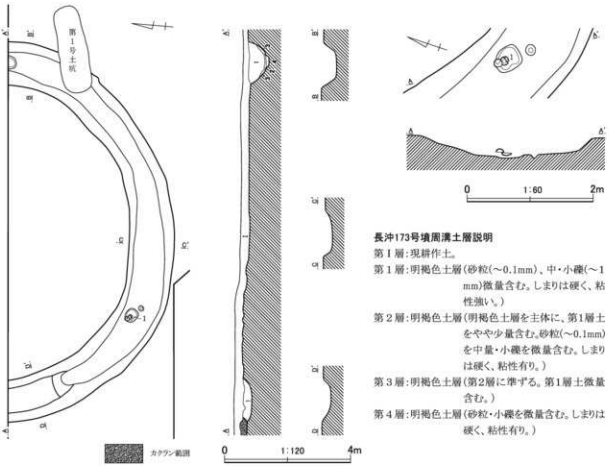
出土遺物は、埴輪の破片は一片も見られないが、周溝内から完形に近い模倣坏（第７図No１、図版６）と内斜口縁坏（現在所在不明）が、正位と逆位になってかたまって出土している。この２個体の土師器坏は、その出土状態から見て、あるいは須恵器坏の身と蓋のような関係で、周溝内に供献されたものかもしれない。

本古墳跡の時期は、出土したこれらの土器の時期から、５世紀末～６世紀初頭頃と考えられる。

第７図　長沖173号墳出土遺物

第173号墳出土遺物観察表

1	坏	A．口縁部径13.6、器高5.5。B．粘土紐積み上げ。C．口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデの後下半ケズリ、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－明茶褐色。F．ほぼ完形。G．体部外面に黒斑あり。H．周溝内。



長沖173号墳周溝土層説明

第Ⅰ層:現耕作土。

第１層:明褐色土層(砂粒(～0.1mm)、中・小礫(～1mm)微量含む。しまりは硬く、粘性強い。)

第２層:明褐色土層(明褐色土層を主体に、第1層土をやや少量含む。砂粒(～0.1mm)を中量・小礫を微量含む。しまりは硬く、粘性有り。)

第３層:明褐色土層(第2層に準ずる。第1層土微量含む。)

第４層:明褐色土層(砂粒・小礫を微量含む。しまりは硬く、粘性有り。)

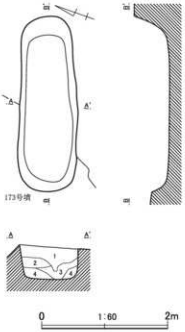
第８図　長沖173号墳

２．土　　坑

第１号土坑（第９図、図版５－２）

調査区の東端に位置し、長沖173号墳の東側周溝を切っている。平面形は、コーナー部の丸みが強く、北東～南西方向に長い長方形を基調にしている。規模は、北東～南西方向が2.80m、北西～南東方向が94cmを測る。確認面からの深さは、55cmある。壁は、北西側壁と南東側壁は直線的に立ち上がるが、北東側壁と南西側壁はやや緩やかに傾斜して立ち上がっている。底面は、広く平坦である。覆土は、暗褐色粘質土を主体にしている。

出土遺物はなく、本土坑の時期は不明である。



第１号土坑土層説明

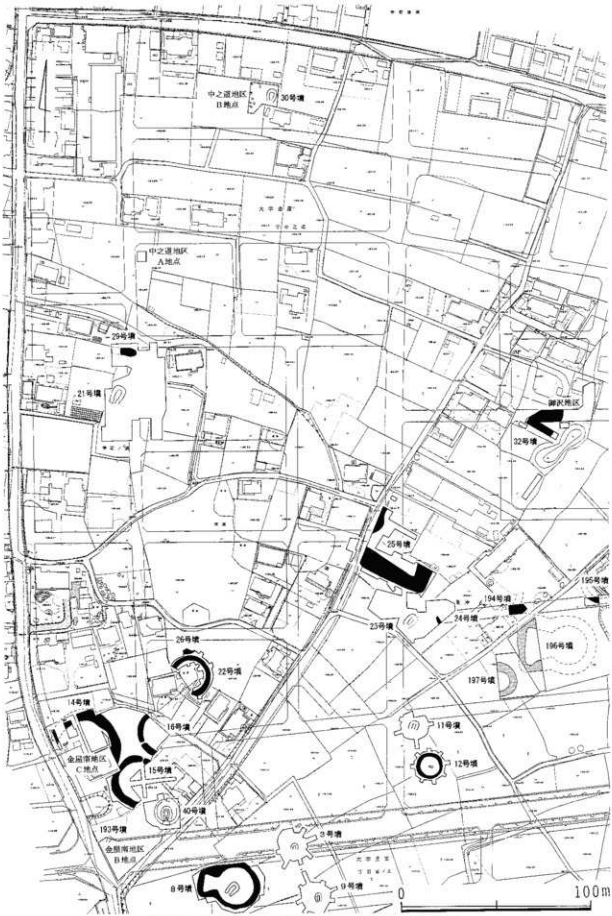
第１層:暗褐色粘質土層(径10～20mmの片岩粒を含む。しまり・粘性とも強い。)

第２層:暗褐色粘質土層(径10～20mmの明灰茶褐色粘質土粒を若干含む。しまり・粘性とも強い。)

第３層:暗褐色粘質土層(径10～30mmの明灰茶褐色粘質土粒を多量に含む。しまり・粘性とも強い。)

第４層:明灰茶褐色粘質土層(径10～40mmの明灰茶褐色粘質土粒を多量に含む。しまり・粘性とも強い。)

第９図　第１号土坑

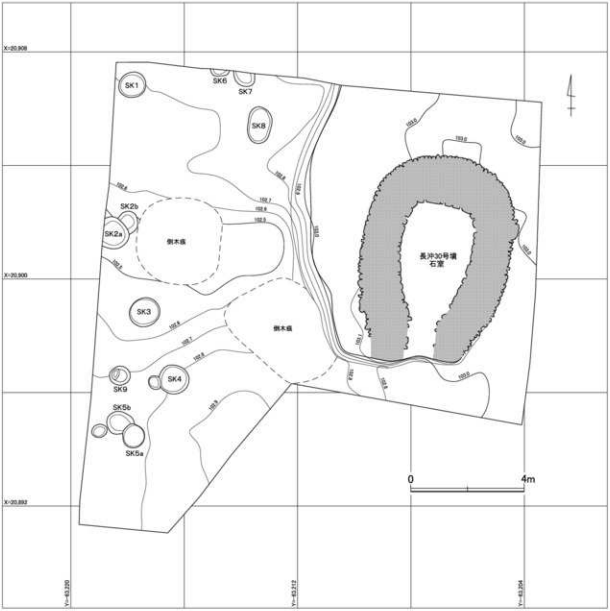


第10図　中之道地区Ｂ地点周辺の発掘調査・確認地点

第Ⅳ章　中之道地区Ｂ地点の発掘調査

第１節　Ｂ地点の概要

中之道地区Ｂ地点は、墳丘が現存する長沖30号墳を主とするもので、長沖古墳群の北端付近に位置する。調査区内からは、古墳１基のほか、土坑11基が検出されている。長沖30号墳は、模様積みの胴張横穴式石室を主体部とする古墳で、周溝や墳丘の大部分は後世の耕作によって削平された可能性が高く、その墳形や規模は不明である。また、古墳の墳丘は、古くから「ドンド焼き」のような地域的信仰に利用されており、そのため石室の棺床面近くまで撹乱を受けている。古墳に伴うと考えられる遺物は、石室内の棺床面や撹乱内から、耳環・ガラス小玉・弓金具・鉄鏃・刀子・鐔・須恵器甕の破片が出土している。この他では、縄文時代中期末の土器片と中・近世の遺物も見られる。



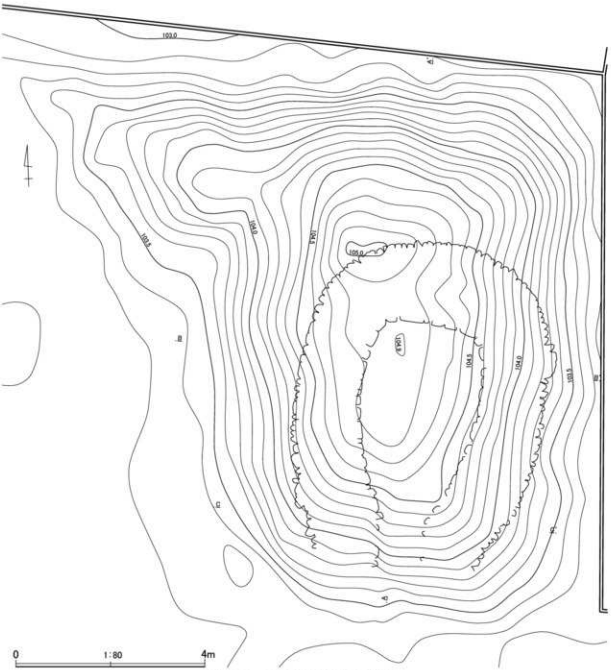
第11図　長沖古墳群中之道地区Ｂ地点全体図

第２節　検出された遺構と遺物

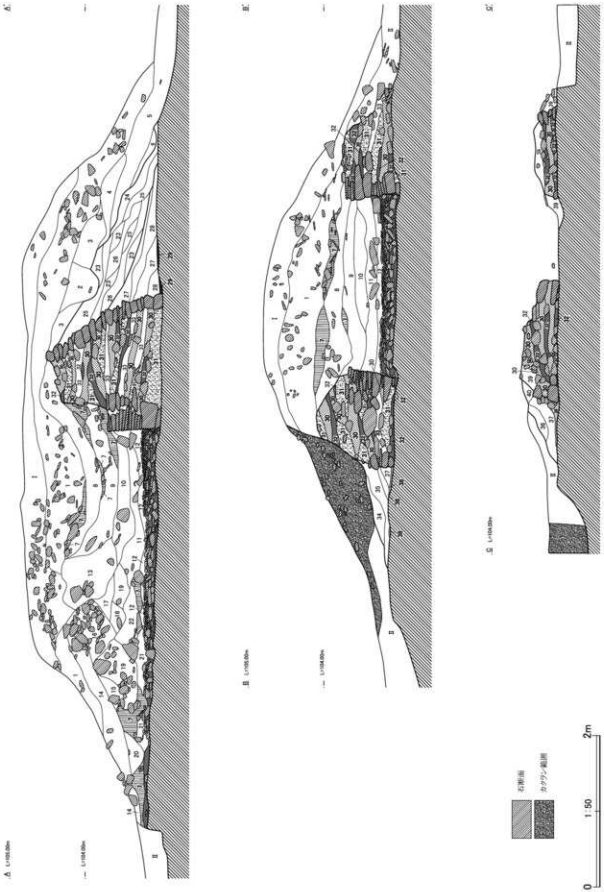
１．古　　墳

長沖30号墳（第12図、図版７）

長沖30号墳は、現在までに確認されている長沖古墳群の古墳分布の中では北東端に位置し、小山川(旧身馴川)に沿って東西方向に延びる児玉丘陵下の氾濫原に立地している。周囲には地表面で確認できる古墳はなく、最も近いもので東側の前方後円墳とされる長沖31号墳との距離が約200m、南側の長沖21号墳や長沖29号墳との距離が約150m離れている。現状では、他の古墳とやや離れて単独的に存在しているように見えるが、おそらくは長沖古墳群の他の支群と同じように、南側の丘陵先端部の



第12図　長沖30号墳墳丘測量図



第13図　長沖30号墳墳丘土層断面図

長沖30号墳墳丘土層説明

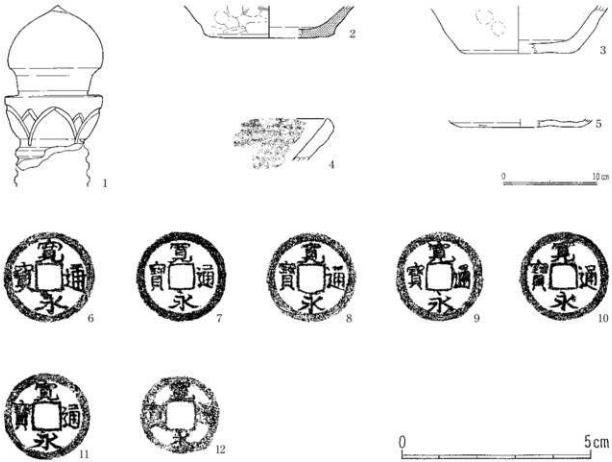
第１層：表土。
第１層：暗茶褐色土層（黄白色粘土粒子を均一に、黄白色粘土ブロック・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第２層：暗褐色土層（A軽石・小石を微量に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第３層：暗褐色土層（小石を均一に、A軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第４層：暗褐色土層（小石を均一に、A軽石を微量含む。粘性に富み、しまりはない。）
第５層：黒褐色土層（小石を均一に、黄白色粘土ブロック・A軽石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第６層：暗褐色土層（黄白色粒子・A軽石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第７層：暗黄褐色砂礫層（黄褐色細砂を主体に、礫を多量に含む。粘性・しまりともない。）
第８層：黒褐色土層（黄白色粘土ブロック・小石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第９層：暗褐色土層（黄白色粘土粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第10層：暗褐色土層（黄白色粘土粒子を微量・小石を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第11層：黒褐色土層（黄白色粘土ブロックを均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第12層：黒褐色土層（黄褐色細砂を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第13層：暗茶褐色土層（小石を均一に、黄白色粘土粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第14層：黒褐色土層（黄白色粘土粒子を均一に、粘土ブロック・礫を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第15層：暗褐色土層（黄白色粘土粒子を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第16層：黒褐色土層（礫を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第17層：暗茶褐色土層（黄白色粘土ブロック・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第18層：暗茶褐色土層（黄白色粘土粒子微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第19層：暗茶褐色土層（黄白色粘土ブロックを多量に、礫を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第20層：暗褐色土層（黄白色粘土粒子を均一に、礫を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第21層：黒色土層（礫を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第22層：暗褐色土層（黄白色粘土ブロック・礫を均一に含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第23層：暗茶褐色土層（黄褐色粒子・小石を微量含む。粘性・しまりともない。）
第24層：暗褐色土層（黄褐色粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第25層：黒褐色土層（小石を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第26層：暗褐色土層（小石を均一に、白色粒子を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第27層：黒褐色土層（小石を均一に、黄褐色細砂を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第28層：暗褐色土層（小石を均一に、礫・黄褐色細砂を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第29層：黄褐色砂礫層（黄褐色細砂を主体に、小礫を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第30層：黄褐色砂礫層（細砂・小礫を主体。粘性・しまりともない。）
第31層：黄褐色砂礫層（小石・小礫を主体。粘性・しまりともない。）
第32層：黄褐色細砂層（細砂を主体。粘性・しまりともない。）
第33層：黒褐色土層（小礫少量。粘性・しまりともない。）
第34層：暗褐色土層（黄褐色粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第35層：暗茶褐色土層（黄褐色粒子を均一に、小石・小礫を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第36層：黒褐色土層（白色粒子・小石を微量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第37層：暗褐色土層（黄褐色細砂・小石を少量含む。粘性に富み、しまりを有する。）
第38層：黄褐色砂層（黄褐色細砂を主体とする。粘性・しまりともない。）
第39層：暗茶褐色砂礫層（細砂・小礫を多量含む。粘性・しまりともない。）
第40層：黄褐色砂礫層（細砂・小礫・小石を多量含む。粘性・しまりともない。）

長沖21号墳や長沖29号墳などから続く緩やかな微高地の尾根筋に古墳が列状に並ぶような支群を構成していたのではないかと思われる。

調査前の古墳は、北側と東側は民家の壁によって墳丘間際まで区切られ、墳丘上には高さ10m程度の一本の大きな木と低木が数本生い茂っており、畑の隅にある小さな雑木林のような状況であった。墳丘は、現地表から1.6mの高さがあり、南北方向12m・東西方向８m程度の隅丸長方形ぎみの形態で、後世の耕作等によってかなり変形していることが窺えた（第12図、図版７）。墳丘の北西側に見られる張り出しは、古墳とは関係のないダンプカーによって運ばれたゴミの混じった土であった。

本古墳の墳丘は、撹乱がひどく墳頂部を中心に火を焚いていた痕跡が認められた。これは石室の棺

床面近くまで穴を掘って、かなり長期にわたって墳丘内で火を焚く行為が行われていたようで、行為が行われなくなって断絶した以降に、第１層により厚く埋め戻されて墳頂部は平らにされたようである。発掘調査の様子を見学に来られた近くの複数の老人の話によると、子供の頃にはこの古墳の墳丘上で道祖神祭りに関係する「ドンド焼き」のような行事が行われていたとのことである。本古墳の近



第14図　長沖30号墳墳丘撹乱内出土遺物

長沖30号墳墳丘撹乱内出土遺物観察表

1	宝篋印塔 （相　輪）	A．残存高17.0、最大幅10.4。C．縦長の形態で、請花の沈線は左回りに施文。D．安山岩。F．九輪以下を欠失。G．表面は風化している。H．墳丘上。
2	常滑窯系 片　口　鉢	A．底部径(13.8)。B．粘土紐積み上げ後、ロクロ調整。C．体部外面ハケの後雑なナデ,内面ナデ。D．黒色粒,白色粒。E．外－暗褐色,内－暗燈褐色。F．底部1/6破片。G．底部外面に砂付着。内面は良く磨れている。H．墳丘撹乱内。
3	在　地　産 片　口　鉢	A．底部径（12.6）。B．粘土紐積み上げ後、ロクロ調整。C．体部外面ナデ、内面回転ナデ。D．白色粒。E．内外－淡灰色。F．底部1/6破片。G．内面は良く磨れている。H．石室撹乱内。
4	在　地　産 片　口　鉢	B．粘土紐積み上げ後、ロクロ調整。C．口縁部内外面回転ナデ。体部外面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－淡灰褐色。F．口縁部破片。H．墳丘撹乱内。
5	美濃瀬戸系 広　口　壺	A．底部径(12.8)。B．粘土紐積み上げ後、ロクロ調整。C．底部外面回転篦ケズリ、内面回転ナデ。D．白色粒。E．内外－淡黄褐色。F．底部1/6破片。H．墳丘撹乱内。
6	古　　銭	A．直径2.5。B．鋳造。D．銅製。F．完形。G．寛永通宝(古寛永)。裏無文。H．石室撹乱内。
7	古　　銭	A．直径2.4。B．鋳造。D．銅製。F．完形。G．寛永通宝(新寛永)。裏無文。H．墳丘撹乱内。
8	古　　銭	A．直径2.4。B．鋳造。D．銅製。F．完形。G．寛永通宝(新寛永)。裏無文。H．墳丘撹乱内。
9	古　　銭	A．直径2.4。B．鋳造。D．銅製。F．完形。G．寛永通宝(新寛永)。裏無文。H．墳丘撹乱内。
10	古　　銭	A．直径2.4。B．鋳造。D．銅製。F．完形。G．寛永通宝(新寛永)。裏無文。H．墳丘撹乱内。
11	古　　銭	A．直径2.3。B．鋳造。D．銅製。F．完形。G．寛永通宝(新寛永)。裏無文。H．墳丘撹乱内。
12	古　　銭	A．直径2.2。B．鋳造。D．鉄製。F．完形。G．寛永通宝(鉄銭)。裏無文。錆による腐食が激しく、文字は磨滅している。H．墳丘撹乱内。

くには、小山川(旧身馴川)を渡って旧小平村に通じる道(野上児玉線・現県道187号線)や児玉から秩父に通じる秩父街道(児玉金沢秩父線・現県道76号線)が存在することから、それらの道に対する村の出入口として、お祭りが行われていたのであろう。墳丘内の撹乱から出土している近世の陶器類(第14図No５)や寛永通宝(第14図No６～No12、図版22-５・６)などは、この祭りに関係する遺物と思われ、墳丘表土内から出土した宝篋印塔の相輪(第14図No１、図版22-１・２)などは、道祖神の代わりのような信仰の対象として、墳丘上に立てられていた石塔の一部であったかもしれない。

周溝は、調査可能な古墳西側では検出されなかった。墳丘の周辺は、石室を構築した当時の地表面から40cm～50cmほど後世の開墾等によって掘削されていることから、周溝はすでに削平された可能性も考えられる。墳形も、墳丘が石室の間際まで開墾により掘削されているため不明であるが、本古墳を羨道部と前庭部をもつ円墳と仮定し、石室奥壁を中心とした墳丘規格とすると、その規模は最大墳丘内径15m程度と推測される。

石室の控積みを覆う墳丘盛土は、石室の間際まで後世の開墾による削平や撹乱が及んでいるため、墳丘下部の一部しか残存していない。それらは、主に小石を均一に含む暗褐色土と黒褐色土の互層による斜方向堆積の盛土で、一般的な横穴式石室古墳と同じく、石室の構築作業単位と対応する盛土の仕方であろう。葺石の有無については、確認できなかった。

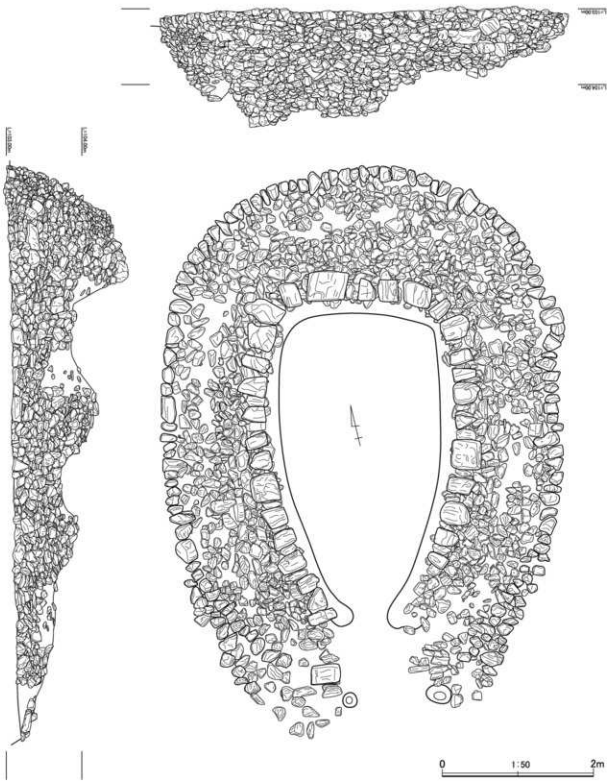
主体部は、石室の外側に控積みをもつ川原石積みの胴張横穴式石室である(第15・16図、図版13-１)。主軸方位は、N―170°―Wをとり、ほぼ南に向いて開口している。石室の遺存状態はあまり良好ではなく、前庭部から羨道部の玄門あたりまではすでに削平されている。残存する石室の規模は、羨道部から玄室奥壁の控積みまでの南北方向が7.53m、玄室東西両壁の控積みまでの東西方向が5.28mである。玄室も棺床面近くまで撹乱が及んでおり、玄室の各壁面は全体の下半以下が残存している程度である。天井石は、墳丘上や石室内には一枚も見られず、すでに持ち去られたものと思われる。

石室外側の控積みは、西側で最高110cm、東側で最高30cm、北側で最高150cm程度残存している(第15図、図版11・12)。玄室壁面からの幅は、東西両側がいずれも1.37m、北側が1.78mを測り、側壁に比べて奥壁側の幅が若干広くなっている。控積みは、やや大きめの根石を小口面や平坦面を揃える感じで玄室の平面プランとほぼ相似形に配列した後、15cm～20cm程度の小形の礫状の転石を主体に、石の面を揃えないで乱石積みにしている。その積み上げ角度は、一般的には石室壁面の持ち送りの角度とほぼ同じ角度で積み上げるが、本古墳の場合は石室壁面の持ち送りの角度に比べてやや緩やかな傾斜で積み上げているようである。

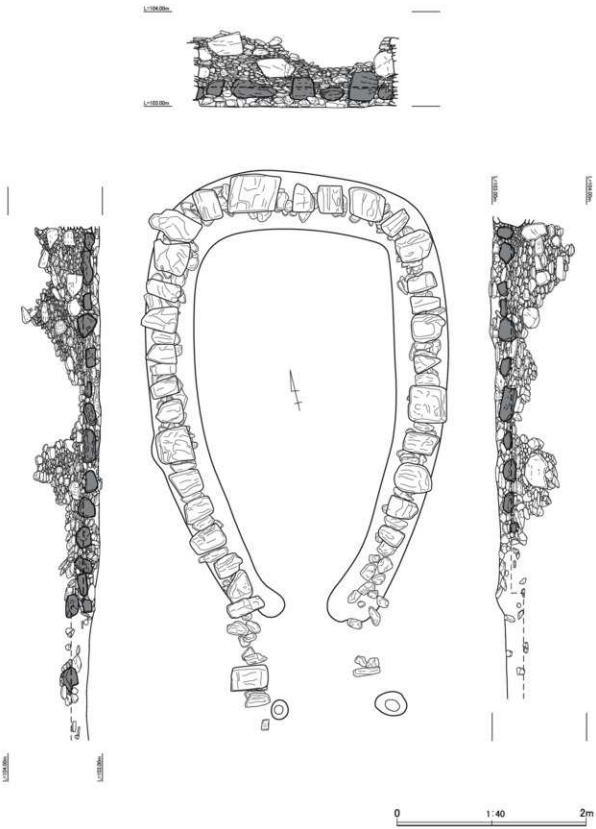
石室壁面と控積み間の後込めは、底面に控積みに使用した石材と同様の小形の転石を敷き詰めた後、黄褐色砂礫層と黄褐色細砂層を互層にして版築状に充填している(第13図、図版20・21)。ちなみに、長沖古墳群の石室の後込めに一般的に使われているこの黄褐色の砂礫と細砂は、本古墳の周辺に広がるローム丘陵下の氾濫原地帯から採取できるもので、本古墳の場合も当時の地表面の黒色土を50cm程度掘り下げると、この黄褐色の砂礫層と細砂層を見ることができる。

羨道部は、西側壁の根石が１個残っていた程度で、その形状は不明であるが、残存する羨道部の壁に関連する石材の位置から推測すると、羨道部の幅は約90cm程度であったと思われる。根石の高さが、玄室壁の根石よりも10cm程度高く、羨道部床面の敷石がすでに削平されていることからすると、古い段階の横穴式石室に見られるような、羨道部床面と玄室棺床面の高さには差があったかもしれない。

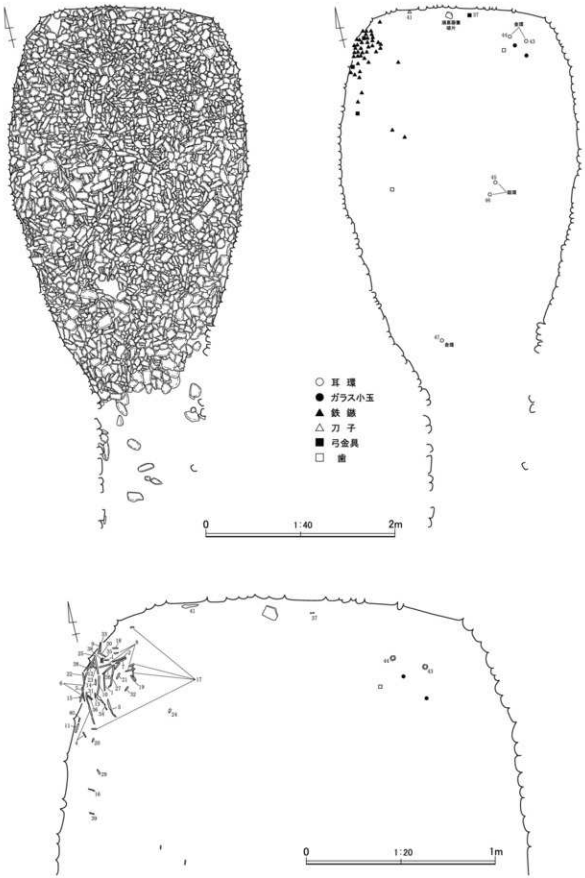
玄室は、平面形が玄門幅よりも奥壁幅の方がかなり広く、最大幅を玄室中央より奥壁に近い方に持つ徳利型の胴張形態である（第16図、図版13）。規模は、玄室長4.15m、最大径2.50m、奥壁幅1.90mで、玄門は不明であるが、羨道部幅と同じ約90cm程度と思われる。



第15図　長沖30号墳石室根石基底面・控積み側面図

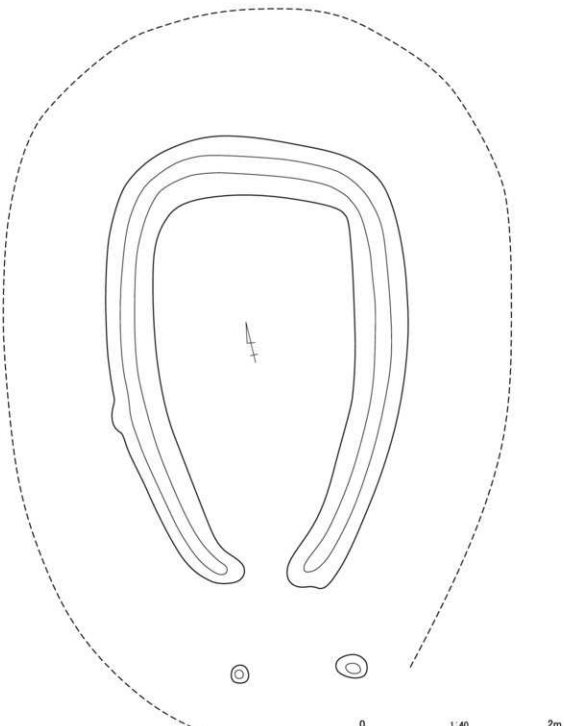


第16図　長沖30号墳石室根石・側壁・奥壁図



第17図　長沖30号墳石室棺床面・遺物出土地点図

壁は、側壁と奥壁のいずれも幅５㎝～10㎝、長さ20㎝～30㎝程度の扁平で長い川原石を、小口面を揃えて積み重ね、その所々に広い平坦面をもつ立方体状の大きな石を重しとして配したいわゆる「模様積み」である（第16図、図版16～18）。すでに各壁ともかなり破壊されており、西側壁で最高80㎝、東側壁で最高85㎝、奥壁で最高80㎝程度残存している。各壁とも、壁面が上方の天井部に向かって徐々に狭くなる持ち送りが認められる。この各壁面に見られる持ち送りは、壁構築材の川原石を石室



第18図　長沖30号墳石室掘り方平面図

内部に向かって傾斜させて小口面を揃えながら積み上げる技法で、その傾斜角度は石室構築における最初の根石を配置する段階で、根石上面の平坦面を内側に傾斜するように設置することにより設定されている(図版14)。また、模様積みの見られる各壁面は、「二列交互重ね積み」によって構築されており、壁面の裏側にもう一列同様の扁平で長い川原石を、壁面に使用した一列目の川原石の裏側端部と、二列目の川原石の小口を交互に若干重ねながら、積み上げて作られている(図版19)。この二列交互重ね積みは、基本的に壁面裏の二列目には模様石のような大形の石材による重しは単独で使用されないようで、壁面の長い模様石を使って前後列とも一緒に抑えられている場合が多いようである。

玄門は、東側に関しては一枚石を使用した門柱石であったようで、長さ約1.20m、幅約40cm、厚さ約20cmの比較的大きな板状の緑泥片岩が、玄門付近の玄室棺床面上に転がっていた(図版15-２)。西側については、その痕跡が残っていないため不明である。

棺床面は、長さ15cm～20cm程度の扁平で丸い川原石を、地山から奥壁側で20cm、玄門側で10cm程度大量に敷き詰めて形成している(第17図)。これは、古墳築造前の地表面が自然地形に沿って北側の奥壁側に向かって緩やかに傾斜しているためで、棺床面の石材を敷きつめる厚さを調節して、水平面を作り出している。

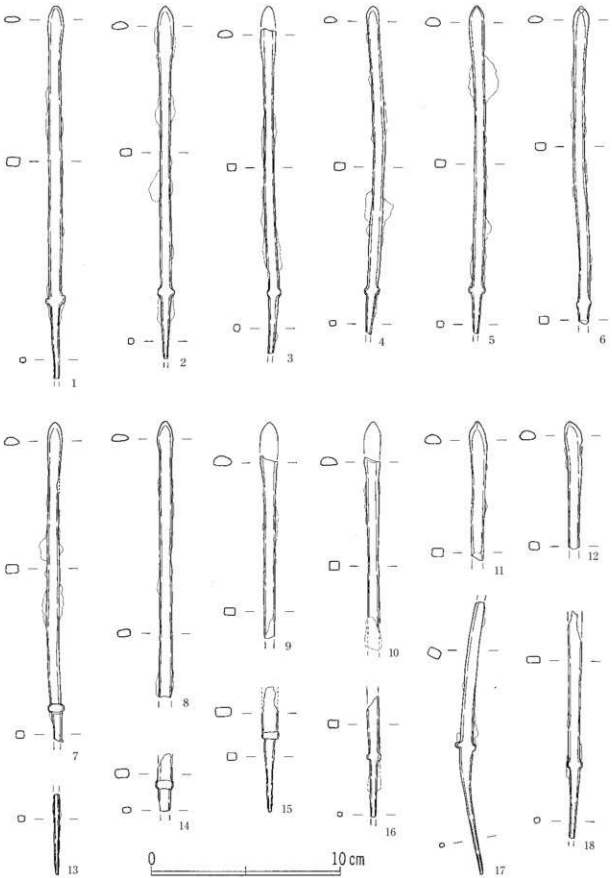
石室の掘り方は、玄室壁の根石の部分に、幅50cm～60cm、深さ10cm程度の浅い馬蹄形状の掘り込みが見られる(第18図、図版15-１)。これは、石室を構築するための地山の地業や造成といったものではなく、玄室の根石の配置や角度を調節するためのズリ石を入れるためのものと考えられる。

近年、当地域の近くでも古墳の下に残る当時の地表面から、畑に伴うと考えられる畝状遺構などが検出され、古墳築造以前の土地利用形態の変遷を考える上で注目されている(金子2004)。本古墳の場合、墳丘下の当時の地表は長沖古墳群の他の古墳と同じく「漆黒の黒色土」であるが、その地表面には何の痕跡も見られなかった。長沖古墳群の墳丘下に見られるこの当時の地表面と考えられる黒色土については、耕作等による土壌の撹拌などが見られないことから、「腐食土主体の土壌」で「古墳群の設営時には、これらの土地が比較的開墾の及ばない山林原野であったことを想起させる」(鈴木2007)と言われている。

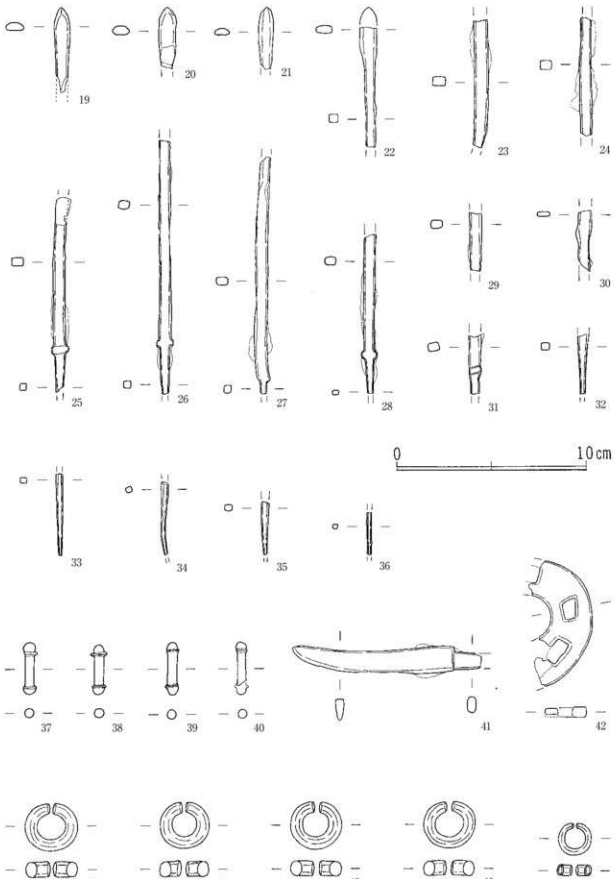
出土遺物は、すでに盗掘によって大形品など主要なものは持ち去られている。残っていたのは、盗掘の際見落とされたと思われるもので、鉄鏃、弓金具、刀子、鞆、耳環、ガラス小玉が玄室内の棺床面やその付近の撹乱内から、須恵器甕の破片が玄室内や墳丘撹乱内から出土している。埴輪は、墳丘や調査区内から一片の破片も出土しておらず、本古墳には伴わなかった可能性が高いと思われる。

鉄鏃は、玄室内の西側壁の奥壁に近い壁際の棺床面からまとまって出土している(第17図、図版23-５・６)。種類は、長頸鏃(田中・瀧瀬他1983、杉山1988)または細根系鏃(関1986)に属し、棘関をもつ片丸造の鑿箭式がほとんどで、関氏のⅥ期(関1986)、杉山氏のⅪ期～Ⅻ期(杉山1988)に該当するものである。本数は、18本前後と推測される(第19・20図No１～No36、図版26・27)。出土状態は、南北方向に向いているものが多いが、鏃身の方向が一定しておらず、破片になって散らばっている様子も窺え、錆で融着しているものも少ないことから、その置かれていた状態は、結束してまとめられていたものではないと思われる。

弓金具は、玄室内から４個出土している(第20図No37～No40、図版27)。No37が奥壁壁際の覆土中から離れて出土している他は、いずれも西側壁の奥壁に近い壁際の棺床面上で鉄鏃の破片に混じって出



第19図　長沖30号墳石室内出土金属製品（1）



第20図　長沖30号墳石室内出土金属製品（２）

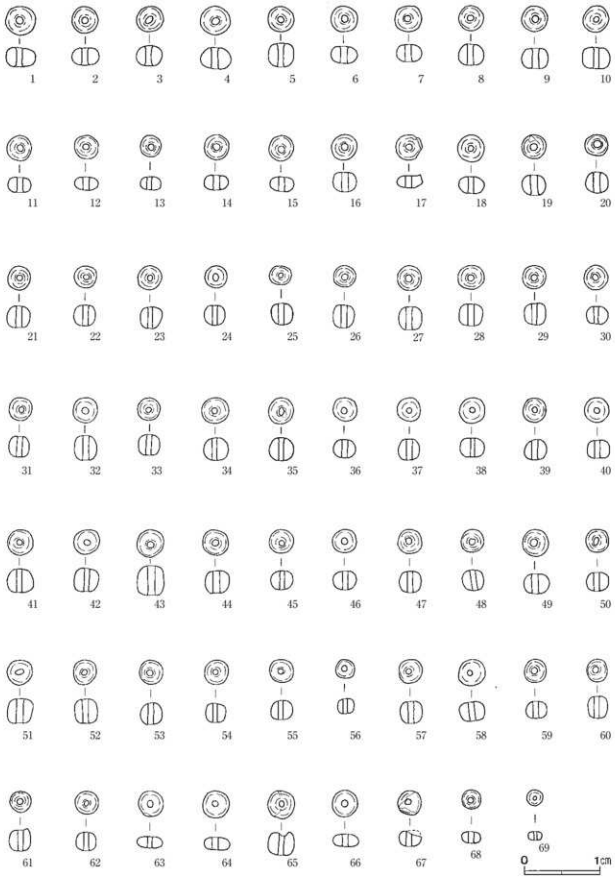
長沖30号墳石室内出土金属製品観察表

1	鉄	鏃	A．残存長19.7、鏃身～頸部15.6、茎部(4.1)。D．鉄製。F．茎部端を欠損。G．長經鋲関片丸造鑿箭式。H．棺床面。
2	鉄	鏃	A．残存長18.7、鏃身～頸部15.1、茎部(3.6)。D．鉄製。F．茎部端を欠損。G．長經鋲関鋭片丸造鑿箭式。H．棺床面。
3	鉄	鏃	A．残存長17.2、鏃身～頸部(14.0)、茎部(3.2)。D．鉄製。F．鏃身先端と茎部端を欠損。G．長經鋲関片丸造鑿箭式。H．棺床面。
4	鉄	鏃	A．残存長17.4、鏃身～頸部15.1、茎部(2.3)。D．鉄製。F．茎部端を欠損。G．長經鋲関片丸造鑿箭式。H．棺床面。
5	鉄	鏃	A．残存長17.4、鏃身～頸部15.1、茎部(2.3)。D．鉄製。F．茎部端を欠損。G．長經鋲関片丸造鑿箭式。鏃身部分は湾曲している。H．棺床面。
6	鉄	鏃	A．残存長16.6、鏃身～頸部15.6、茎部(1.0)。D．鉄製。F．茎部の大部分を欠損。G．長經鋲関片丸造鑿箭式。H．棺床面。
7	鉄	鏃	A．残存長16.9、鏃身～頸部15.1、茎部(1.8)。D．鉄製。F．茎部端を欠損。G．長經鋲関片丸造鑿箭式。H．棺床面。
8	鉄	鏃	A．残存長14.6。D．鉄製。F．茎部を欠損。G．長經鋲関片丸造鑿箭式。H．棺床面。
9	鉄	鏃	A．残存長9.6。D．鉄製。F．鏃身の大部分と茎部を欠損。G．長經鋲関片丸造鑿箭式。H．棺床面。
10	鉄	鏃	A．残存長10.2。D．鉄製。F．鏃身の大部分と茎部を欠損。G．長經鋲関片丸造鑿箭式。H．棺床面。
11	鉄	鏃	A．残存長7.4。D．鉄製。F．頸部の半分と茎部を欠損。G．長經鋲関片丸造鑿箭式。H．棺床面。
12	鉄	鏃	A．残存長6.7。D．鉄製。F．頸部の半分と茎部を欠損。G．長經鋲関片丸造鑿箭式。H．棺床面。
13	鉄	鏃	A．残存長4.3。D．鉄製。F．茎部のみ。H．棺床面。
14	鉄	鏃	A．残存長3.1。D．鉄製。F．頸部～茎部の一部のみ。H．棺床面。
15	鉄	鏃	A．残存長6.6、茎部4.1。D．鉄製。F．茎部のみ。H．棺床面。
16	鉄	鏃	A．残存長6.4。D．鉄製。F．鏃身～頸部の大部分と茎部端を欠損。H．棺床面。
17	鉄	鏃	A．残存長14.5、茎部6.8。D．鉄製。F．鏃身～頸部の一部を欠損。G．全体に湾曲している。H．棺床面。
18	鉄	鏃	A．残存長12.0。D．鉄製。F．鏃身～頸部の一部と茎部端を欠損。H．棺床面。
19	鉄	鏃	A．残存長4.5。D．鉄製。F．頸部以下を欠損。G．片丸造。H．棺床面。
20	鉄	鏃	A．残存長3.3。D．鉄製。F．頸部以下を欠損。G．片丸造。H．棺床面。
21	鉄	鏃	A．残存長3.3。D．鉄製。F．頸部以下を欠損。G．片丸造。H．棺床面。
22	鉄	鏃	A．残存長6.4。D．鉄製。F．鏃身先端と 頸部以下を欠損。G．片丸造。H．棺床面。
23	鉄	鏃	A．残存長6.8。D．鉄製。F．鏃身と茎部を欠損。H．棺床面。
24	鉄	鏃	A．残存長6.3。D．鉄製。F．鏃身と茎部を欠損。H．棺床面。
25	鉄	鏃	A．残存長10.3。D．鉄製。F．鏃身と茎部端を欠損。H．棺床面。
26	鉄	鏃	A．残存長13.4。D．鉄製。F．鏃身と茎部端を欠損。H．棺床面。
27	鉄	鏃	A．残存長12.6。D．鉄製。F．鏃身と茎部端を欠損。G．頸部は湾曲して曲がっている。H．棺床面。
28	鉄	鏃	A．残存長8.4。D．鉄製。F．鏃身と茎部端を欠損。H．棺床面。
29	鉄	鏃	A．残存長3.1。D．鉄製。F．頸部の一部。H．棺床面。
30	鉄	鏃	A．残存長3.2。D．鉄製。F．頸部の一部。H．棺床面。
31	鉄	鏃	A．残存長3.2。D．鉄製。F．頸部と茎部の一部。H．棺床面。
32	鉄	鏃	A．残存長3.1。D．鉄製。F．茎部の一部。H．棺床面。
33	鉄	鏃	A．残存長4.3。D．鉄製。F．茎部の一部。H．棺床面。
34	鉄	鏃	A．残存長3.9。D．鉄製。F．茎部の一部。H．棺床面。
35	鉄	鏃	A．残存長2.4。D．鉄製。F．茎部の一部。H．棺床面。
36	鉄	鏃	A．残存長2.2。D．鉄製。F．茎部の一部。H．棺床面。
37	弓	金具	A．全長2.7、幅0.5。D．鉄製。F．完形。G．中は中空と思われる。H．覆土中。
38	弓	金具	A．全長2.6、幅0.5。D．鉄製。F．完形。G．中は中空と思われる。H．棺床面。
39	弓	金具	A．全長2.8、幅0.5。D．鉄製。F．完形。G．中は中空と思われる。H．棺床面。
40	弓	金具	A．残存長2.3、幅0.5。D．鉄製。F．片側の留金具を欠損。G．中は中空と思われる。H．棺床面。
41	刀	子	A．残存長10.0、幅1.4、厚さ0.4。D．鉄製。F．柄の一部を欠損。G．刃部はかなり擦り減っている。H．棺床面。
42	鐔		A．残存長6.7、残存幅3.0、厚さ0.5。D．鉄製。F．1/2弱。G．台形と長方形の窓を持つ6窓の有窓鐔と思われる。H．玄室西側壁石組上面。
43	耳	環	A．縦2.5、横2.75、幅0.85、厚さ0.6。D．銅地金貼り。F．完形。G．中実。H．棺床面。
44	耳	環	A．縦2.4、横2.6、幅0.8、厚さ0.6。D．銅地金貼り。F．完形。G．中実。H．棺床面。
45	耳	環	A．縦2.5、横2.7、幅0.8、厚さ0.6。D．銅地銀貼り。F．完形。G．中実。H．棺床面。
46	耳	環	A．縦2.4、横2.7、幅0.8、厚さ0.6。D．銅地銀貼り。F．完形。G．中実。H．棺床面。
47	耳	環	A．縦1.7、横1.75、幅0.6、厚さ0.3。D．銅地金貼り。F．完形。G．中空。H．棺床面。

土しており、鉄鏃と関係の深い鉄製品であることが窺える。

刀子は、奥壁の壁際の棺床面から、１個出土している(第17図、図版23-７・８)。刃部の背が若干湾曲する比較的珍しい形態のもので、刃は擦り減って幅がやや狭くなっている(第20図No41、図版27)。

鐔は、玄室西側壁中ほどの壁石組上面から出土している(図版22-３・４)。その出土位置から見て、おそらく盗掘の際に落して行ったものと推測される。形態は、台形と長方形の窓をもつ有窓鐔で、６窓と思われる(第20図No42、図版27)。



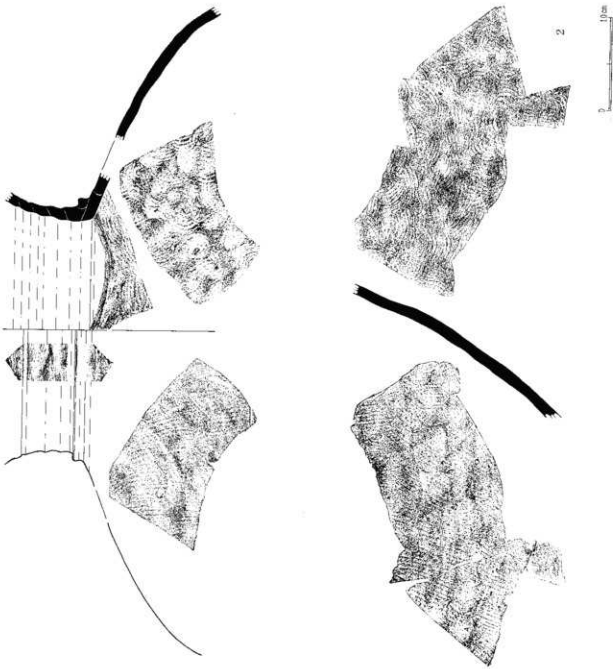
第21図　長沖30号墳石室内出土ガラス小玉

長沖30号墳石室内出土ガラス小玉観察表

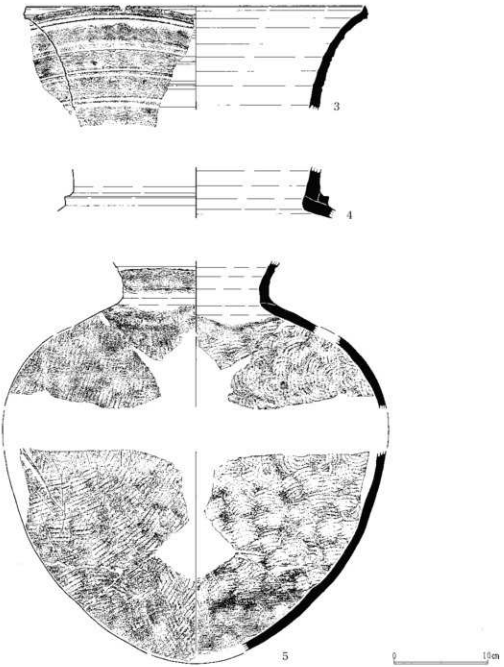
1	小	玉	A．直径0.4、高さ0.25．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
2	小	玉	A．直径0.35、高さ0.25．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
3	小	玉	A．直径0.35、高さ0.275．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れて汚れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
4	小	玉	A．直径0.4、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
5	小	玉	A．直径0.35、高さ0.325．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
6	小	玉	A．直径0.35、高さ0.2．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
7	小	玉	A．直径0.35、高さ0.25．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
8	小	玉	A．直径0.35、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
9	小	玉	A．直径0.35、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
10	小	玉	A．直径0.35、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
11	小	玉	A．直径0.3、高さ0.2．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
12	小	玉	A．直径0.325、高さ0.175．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
13	小	玉	A．直径0.225、高さ0.155．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
14	小	玉	A．直径0.325、高さ0.225．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れが見られ、やや汚れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
15	小	玉	A．直径0.325、高さ0.2．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
16	小	玉	A．直径0.325、高さ0.25．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
17	小	玉	A．直径0.35、高さ0.15．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れとバリが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
18	小	玉	A．直径0.35、高さ0.225．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
19	小	玉	A．直径0.325、高さ0.275．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
20	小	玉	A．直径0.3、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
21	小	玉	A．直径0.3、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
22	小	玉	A．直径0.3、高さ0.275．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
23	小	玉	A．直径0.3、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
24	小	玉	A．直径0.3、高さ0.275．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
25	小	玉	A．直径0.3、高さ0.275．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
26	小	玉	A．直径0.3、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
27	小	玉	A．直径0.3、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
28	小	玉	A．直径0.35、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
29	小	玉	A．直径0.3、高さ0.275．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
30	小	玉	A．直径0.325、高さ0.225．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
31	小	玉	A．直径0.3、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
32	小	玉	A．直径0.3、高さ0.325．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。

33	小	玉	A．直径0.3、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
34	小	玉	A．直径0.35、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
35	小	玉	A．直径0.35、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
36	小	玉	A．直径0.3、高さ0.25．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
37	小	玉	A．直径0.3、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
38	小	玉	A．直径0.35、高さ0.25．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
39	小	玉	A．直径0.275、高さ0.275．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
40	小	玉	A．直径0.325、高さ0.225．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
41	小	玉	A．直径0.35、高さ0.325。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
42	小	玉	A．直径0.35、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
43	小	玉	A．直径0.35、高さ0.4。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
44	小	玉	A．直径0.35、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
45	小	玉	A．直径0.3、高さ0.25．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
46	小	玉	A．直径0.3、高さ0.25。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
47	小	玉	A．直径0.3、高さ0.275。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
48	小	玉	A．直径0.3、高さ0.275。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
49	小	玉	A．直径0.35、高さ0.275。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
50	小	玉	A．直径0.3、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
51	小	玉	A．直径0.35、高さ0.325。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
52	小	玉	A．直径0.325、高さ0.325。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
53	小	玉	A．直径0.3、高さ0.3．B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
54	小	玉	A．直径0.325、高さ0.25。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
55	小	玉	A．直径0.3、高さ0.25。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
56	小	玉	A．直径0.25、高さ0.2。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
57	小	玉	A．直径0.3、高さ0.3。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
58	小	玉	A．直径0.35、高さ0.25。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれい。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
59	小	玉	A．直径0.3、高さ0.225。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
60	小	玉	A．直径0.3、高さ0.3。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
61	小	玉	A．直径0.275、高さ0.3。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
62	小	玉	A．直径0.3、高さ0.25。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
63	小	玉	A．直径0.325、高さ0.175。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面は比較的きれいで、ひび割れとバリが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
64	小	玉	A．直径0.35、高さ0.175。B．型作り。D．ガラス製。E．くすんだ濃紺色。F．完形。G．表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
65	小	玉	A．直径0.35、高さ0.3。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．完形。G．表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。

66	小	玉	A．直径0.35、高さ0.15。B．型作り。D．ガラス製。E．くすんだ濃紺色。F．完形。G．表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
67	小	玉	A．直径0.3、高さ0.2。B．型作り。D．ガラス製。E．濃紺色。F．一部欠損。G．表面はひび割れ多く、荒れている。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
68	小	玉	A．直径0.25、高さ0.15。B．型作り。D．ガラス製。E．マリンブルー色。F．完形。G．表面はやや汚く、ひび割れが見られる。微細な気泡を多数含む。H．棺床面。
69	小	玉	A．直径0.2、高さ0.1。B．型作り。D．ガラス製。E．マリンブルー色。F．完形。G．表面は比較的きれい。微細な気泡を少数含む。H．棺床面。



第22図　長沖30号墳出土須恵器（1）



第23図　長沖30号墳出土須恵器（２）

長沖30号墳出土須恵器観察表

1	須恵器 大甕	A．頸部径（26.0）。B．粘土紐積み上げ後、胴部叩き成形。頸部凸帯貼り付け。C．口頸部内外面回転ナデ。口縁部外面櫛描波状文。胴部外面叩き（平行叩き目）の後ナデ,内面当道具痕（青海波文）を残す。D．黒色粒,白色粒。E．口頸部内外－淡褐色，胴部内外－淡灰色。F．口頸部 1/4、胴部破片。H．石室内。
2	須恵器 大甕	B．粘土紐積み上げ後、叩き成形。。C．胴部外面叩き（平行叩き目）、内面当道具痕（青海波文）を残す。D．白色粒、小石。E．外－暗灰色、内－灰色。F．胴部破片。H．石室内、墳丘内。
3	須恵器 大甕	A．口縁部径（36.6）。B．粘土紐積み上げ後、ロクロ調整。C．口縁部内外面回転ナデの後、外面に櫛描波状文を施す。D．白色粒。E．内外－暗灰色。F．口縁部 1/6 破片。H．石室内。
4	須恵器 大甕	A．頸部径（26.4）。B．粘土紐積み上げ後、ロクロ調整。頸部凸帯貼り付け。C．頸部内外面回転ナデ。D．白色粒。E．内外－淡灰色。F．頸部 1/6 破片。H．墳丘内。
5	須恵器 大甕	A．頸部径（15.8）、残存高（41.2）。B．粘土紐積み上げ後、胴部叩き成形。C．口頸部内外面回転ナデの後、外面に櫛描波状文を施す。胴部外面叩き（平行叩き目）の後下半雑なナデ,内面当道具痕（青海波文）を残す。D．片岩粒、黒色粒、白色粒。E．外－暗茶灰色、内－灰色。F．頸部 1/4 破片、胴部破片。H．石室内、墳丘内。

耳環は、玄室の棺床面上から５個出土している(第20図、図版73)。位置は、No43とNo44の金環が奥壁東側寄りの壁際から、No45とNo46の銀環が中央付近から、No47の中空で小形の金環が玄門寄りの南側から単独で出土している(第17図)。No43とNo44の１対の金環とNo45とNo46の１対の銀環は、その出土状態から見て、それぞれ遺体に装着されていたのが、そのままその場所に残ったものと考えられる。No47の金環は、他の耳環とは大きさや作りが異なる単独出土のもので、その出土場所から見ても、盗掘時に攪拌されて原位置から移動しているか、あるいは被葬者に装着されない単独の副葬品の可能性が高いのではないかと思われる。

ガラス小玉は、すべて玄室北側のNo43とNo44の金環が出土した場所のすぐ南側から出土している。棺床面の石の隙間から全部で69個検出されたが、本来はもっとあったものと思われる(第21図、図版28)。いずれも直径３㎜前後、高さ1.5㎜～３㎜程度の小さいもので、すべて鋳型による型作りである(長滝歳康氏の御教示による)。色調は、濃紺色が67個、マリンブルー色が２個ある。これらのガラス小玉は、その出土位置から見て、No43とNo44の１対の金環を付けていた被葬者が、頸飾りの一部として身に着けていたものであろう。

須恵器は、石室や墳丘の攪乱内から甕の破片が多く出土している(第22・23図、図版22-７・８)。これらは、同一個体の破片も比較的多く見られ、時期的にも本古墳に関係するものと考えられるが、石室内にあったものか墳丘上に置かれていたものか明確ではない。大甕の中には、頸部外面に補強帯の貼り付け凸帯を持つ上野型の特徴的な甕(第22図No１、第23図No４)も見られる。

本古墳の石室に埋葬された被葬者は、出土した耳環の数とその出土状態から、２体以上と考えられる。明確なものは、No43とNo44の金環を装着した被葬者Ａと、No45とNo46の銀環を装着した被葬者Ｂで、No47の金環については被葬者の装着品かどうかは不明である。被葬者Ａは、玄室北東隅の奥壁寄りにあり、耳環の位置から南北体位で北頭位に安置されていたと考えられる。装身具は、耳環の他にガラス小玉を伴う。被葬者Ｂは、玄室の中央付近にあり、耳環の位置から東西体位で東頭位に安置されていた可能性が高いと思われる。装身具は、耳環の他は不明である。いずれの被葬者も、その安置された埋葬スペースから、身長は150㎝以下と思われる。この被葬者Ａと被葬者Ｂの安置場所を見ると、被葬者Ａの西側(被葬者Ｂの北側)に、比較的広いスペースが空いており、さらに南北体位の被葬者が１～２体安置されていた可能性もあろう。

本古墳の時期は、石室の特徴や出土遺物の様相及び埴輪を伴わない可能性が高いことから、７世紀前半頃と考えられる。

２．土　　坑

第１号土坑（第24図、図版24）

調査区の北西隅に位置する。平面形は、98㎝×90㎝の円形に近い形態を呈している。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは15㎝ある。底面は、広く平坦である。覆土は、小石を均一に含む黒褐色土を主体にしている。

出土遺物は、覆土中から縄文時代中期末の土器小破片が少量出土しただけである。本土坑の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代中期末の可能性が高いと思われる。

第２ａｂ号土坑（第24図、図版24）

調査区の西端に位置する。２基の土坑が重複しており、西側の第２ａ号土坑が東側の第２ｂ号土坑を切っている。第２ａ号土坑は、北西～南東方向118㎝、北東～南西方向108㎝の円形に近い形態を呈するものと思われる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは22㎝ある。底面は、広く平坦である。覆土は、小石や炭化粒を微量含む黒褐色土を主体にしている。第２ｂ号土坑は、遺構の南西側を第２ａ号土坑に切られているため全容は不明であるが、南北方向82㎝、東西方向70㎝の円形か楕円形に近い形態を呈するものと思われる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは14㎝ある。底面は、広く平坦のようである。覆土は、小石や黄褐色粒を微量含む暗褐色土を主体にしている。

出土遺物は、第２ａ号土坑の覆土中から、古代の土師器坏の破片が１片出土しただけである。本土坑の時期は、覆土の状態や出土遺物から、第２ａ号土坑が古代、第２ｂ号土坑が縄文時代中期末の可能性が高いと思われる。

第３号土坑（第24図、図版24）

調査区の西側に位置する。平面形は、110㎝×110㎝の円形を呈している。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは９㎝ある。底面は、広く平坦である。覆土は、黄褐色粒を含む黒褐色土を主体にしている。

遺物は、何も出土しなかった。本土坑の時期は、覆土の状態から、縄文時代中期末の可能性が高いと思われる。

第４号土坑（第24図、図版24）

調査区の南西側に位置する。土坑の西側の一部を近世後半以降のピットに切られている。平面形は、108㎝×103㎝の円形を呈している。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは20㎝ある。底面は、広く平坦である。覆土は、小石を微量含む黒褐色土を主体にしている。

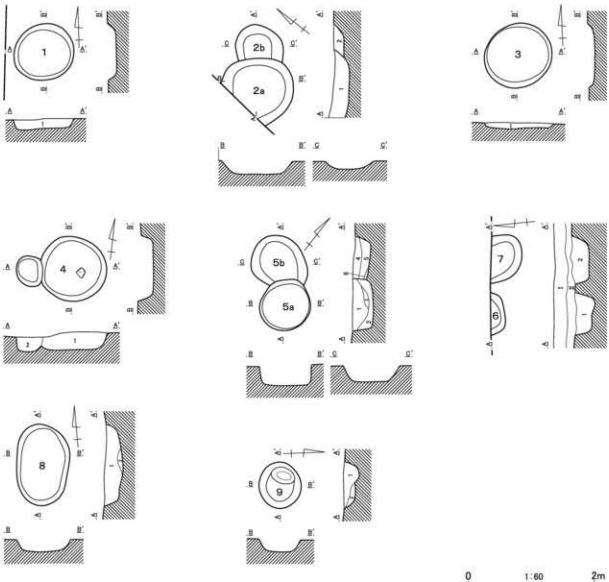
出土遺物は、覆土中から長さ10㎝程度の自然石が１点と、縄文時代中期末の土器小破片が少量出土しただけである（第25図No１）。

本土坑の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代中期末の可能性が高いと思われる。

第５ａｂ号土坑（第24図、図版24）

調査区の南西端に位置する。２基の土坑が重複しており、南東側の第５ａ号土坑が北西側の第５ｂ号土坑を切っている。第５ａ号土坑は、84㎝×77㎝の円形を呈している。壁は、直線的で垂直ぎみに立ち上がり、確認面からの深さは32㎝ある。底面は、広く平坦である。覆土は、黒褐色土を主体にしている。第５ｂ号土坑は、遺構の南東側を第５ａ号土坑に切られているため全容は不明であるが、東西方向98㎝、南北方向81㎝の楕円形に近い形態を呈していたものと思われる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは26㎝ある。底面は、広く平坦のようである。覆土は、小石を均一に含む暗褐色土と小石を微量含む暗黄褐色土を主体にしている。

出土遺物は、第５ａ号土坑の覆土中から、縄文時代中期末の土器小破片が少量出土しただけであ



第24図　土　　坑

中之道地区B地点土坑土層説明

第1号土坑土層説明

第1層:黒褐色土層(小石均一に、黄褐色粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。)

第2ab号土坑土層説明

第1層:黒褐色土層(小石・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。)

第2層:暗褐色土層(小石・黄褐色粒子を微量含む。粘性・しまりともない。)

第3号土坑土層説明

第1層:黒褐色土層(黄褐色粒子を含む。粘性・しまりともない。)

第4号土坑土層説明

第1層:黒褐色土層(小石・茶褐色粒子を微量含む。粘性・しまりともない。)

第2層:黒褐色土層(A軽石・小石を均一に含む。粘性・しまりともない。)

第5ab号土坑土層説明

(第5a号土坑)

第1層:黒褐色土層(茶褐色粒子・小石を微量含む。粘性・しまりともない。)

第2層:暗茶褐色土層(白色粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。)

第3層:暗褐色土層(黄褐色細砂・小石を微量含む。粘性・しまりともない。)

(第5b号土坑)

第4層:暗褐色土層(小石を均一に、茶褐色土を微量含む。粘性・しまりともない。)

第５層：暗黄褐色土層（黄褐色土を主体に、小石を微量含む。粘性・しまりともない。）
第６層：黒褐色土層（黄褐色粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第6・7号土坑土層説明
第１層：黒褐色土層（小石・A軽石を均一に、黄褐色細砂を微量含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗褐色土層（小石を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第8号土坑土層説明
第１層：黒褐色土層（小礫・小石・A軽石を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗褐色土層（小石・黄褐色細砂を均一に含む。粘性・しまりともない。）
第9号土坑土層説明
第１層：黒褐色土層（小石・黄褐色粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
第２層：暗茶褐色土層（黄褐色細砂を均一に含む。粘性・しまりともない。）

る。本土坑の時期は、覆土の状態から、いずれも縄文時代中期末の可能性が高いと思われる。

第６号土坑（第24図、図版24）

調査区の北端に位置し、東側に第７号土坑が近接している。本土坑の北側の大半は調査区外のため、土坑の全容は不明である。規模は、東西方向が67㎝、南北方向は24㎝まで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは29㎝ある。底面は、広く平坦なようである。覆土は、小石や浅間山系A軽石を均一に含む黒褐色土を主体にしている。

出土遺物は、覆土中から縄文時代中期末の土器小破片が少量出土しただけである（第25図No２）。本土坑の時期は、覆土の状態から、近世後半以降と考えられる。

第７号土坑（第24図、図版24）

調査区の北端に位置し、西側に第６号土坑が近接している。本土坑の北側の大半は調査区外のため、土坑の全容は不明である。規模は、東西方向が74㎝、南北方向は50㎝まで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは24㎝ある。底面は、広く平坦なようである。覆土は、小石や炭化粒を含む暗褐色土を主体にしている。

出土遺物は、覆土中から縄文時代中期末～後期の土器片が少量出土しただけである（第25図No３～No５）。本土坑の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代中期末～後期頃と思われる。

第８号土坑（第24図、図版24）

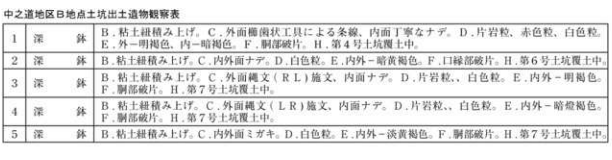
調査区の北側に位置する。平面形は、131㎝×84㎝の楕円形ぎみの形態を呈する。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは28㎝ある。底面は、広くやや丸みをもつ。覆土は、小石や浅間山系A軽石を均一に含む黒褐色土を主体にしている。

出土遺物は、覆土中から縄文時代中期末の土器小破片が少量出土しただけである。本土坑の時期は、覆土の状態から、近世後半以降と考えられる。

第９号土坑（第24図、図版24）

調査区の南西側に位置する。平面形は、74㎝×67㎝の円形ぎみの形態を呈する。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは24㎝ある。底面は、広く平坦で、西端に小ピットをもつ。覆土は、小石を含む黒褐色土を主体にしている。

出土遺物は、覆土中から縄文時代中期末の土器小破片が少量出土しただけである。本土坑の時期は、覆土の状態や出土遺物から、縄文時代中期末の可能性が高いと思われる。



第25図　中之道地区Ｂ地点土坑出土遺物

中之道地区Ｂ地点土坑出土遺物観察表

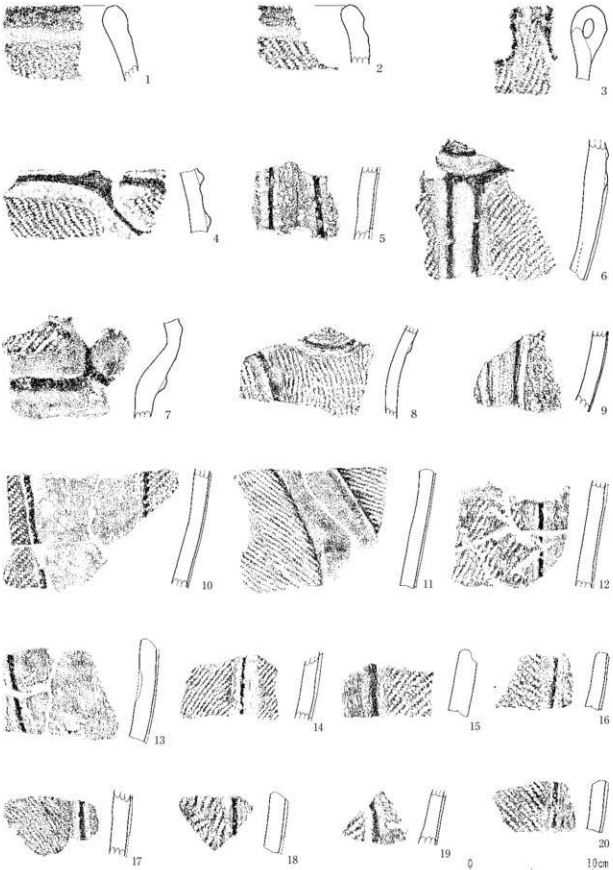
1	深	鉢	Ｂ．粘土紐積み上げ。Ｃ．外面櫛歯状工具による条線、内面丁寧なナデ。Ｄ．片岩粒、赤色粒、白色粒。Ｅ．外－明褐色、内－暗褐色。Ｆ．胴部破片。Ｈ．第４号土坑覆土中。
2	深	鉢	Ｂ．粘土紐積み上げ。Ｃ．内外面ナデ。Ｄ．白色粒。Ｅ．内外－暗黄褐色。Ｆ．口縁部破片。Ｈ．第６号土坑覆土中。
3	深	鉢	Ｂ．粘土紐積み上げ。Ｃ．外面縄文（ＲＬ）施文、内面ナデ。Ｄ．片岩粒、、白色粒。Ｅ．内外－明褐色。Ｆ．胴部破片。Ｈ．第７号土坑覆土中。
4	深	鉢	Ｂ．粘土紐積み上げ。Ｃ．外面縄文（ＬＲ）施文、内面ナデ。Ｄ．片岩粒、、白色粒。Ｅ．内外－暗橙褐色。Ｆ．胴部破片。Ｈ．第７号土坑覆土中。
5	深	鉢	Ｂ．粘土紐積み上げ。Ｃ．内外面ミガキ。Ｄ．白色粒。Ｅ．内外－淡黄褐色。Ｆ．胴部破片。Ｈ．第７号土坑覆土中。

３．調査区内出土の縄文土器

調査区内の表土耕作土層や古墳盛土内から、コンテナ１箱分に及ぶ比較的多くの縄文土器の破片が出土している。時期は、中期後葉から後期前葉頃までのものであるが、大半は中期末の加曽利ＥⅣ式段階である（第26～28図、図版30～32）。調査区内からは、中期末頃と思われる土坑が８基検出されていることから、近くにそれらと関係する集落が存在する可能性が考えられる。ちなみに、本調査区と同じ区画整理地区内にある縄文時代の遺跡には、南西側約150ｍに位置する諸磯期後半以前の住居跡１軒や加曽利ＥⅢ式期の土坑を検出した江の浜遺跡（菅谷浩之他1979、埼玉県1980）、南側約350ｍに位置する勝坂式～加曽利ＥⅢ式期の住居跡や土坑を検出した金屋南遺跡（金屋南地区Ｃ地点）、加曽利ＥⅡ式期の住居跡２軒や土坑を検出した賀家ノ上遺跡（埼玉県1980）などがあるが、本地点の土器や遺構はそれらとは若干時期が異なる別遺跡として捉えられる。

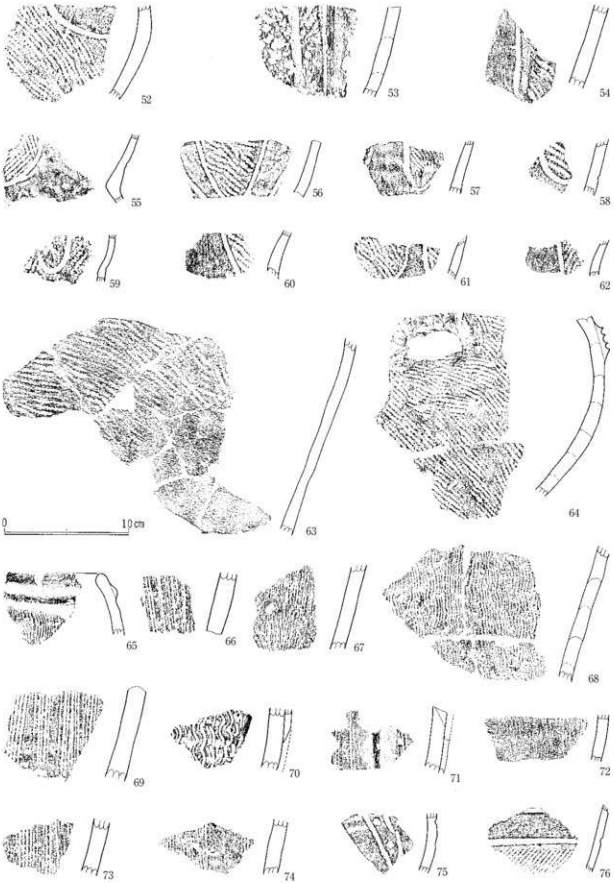
中之道地区Ｂ地点調査区内出土縄文土器観察表

1	深	鉢	Ｂ．粘土紐積み上げ。Ｃ．口縁部外面沈線区画内縄文（RL）施文、内面ナデ。Ｄ．白色粒。Ｅ．内外－淡褐色。Ｆ．口縁部破片。Ｈ．墳丘内。
2	深	鉢	Ｂ．粘土紐積み上げ。Ｃ．口縁部外面沈線区画内縄文（RL）施文、内面ナデ。Ｄ．赤色粒、白色粒。Ｅ．外－淡黄褐色、内－暗黄灰褐色。Ｆ．口縁部破片。Ｈ．墳丘内。
3	深	鉢	Ｂ．粘土紐積み上げ。Ｃ．把手外面縄文（RL）縦位施文、内面ナデ。Ｄ．赤色粒、白色粒。Ｅ．内外－淡黄白色。Ｆ．把手破片。Ｈ．墳丘内。
4	深	鉢	Ｂ．粘土紐積み上げ。Ｃ．口縁部外面隆帯区画内縄文（RL）施文。内面ミガキ。Ｄ．片岩粒、白色粒。Ｅ．内外－明茶褐色。Ｆ．口縁部破片。Ｈ．墳丘内。
5	深	鉢	Ｂ．粘土紐積み上げ。Ｃ．胴部外面隆帯による縦位懸垂文、無文部ミガキ。内面ナデ。Ｄ．片岩粒、赤色粒、白色粒。Ｅ．内外－暗黄褐色、肉－黒色。Ｆ．胴部破片。Ｈ．墳丘内。
6	深	鉢	Ｂ．粘土紐積み上げ。Ｃ．胴部外面隆帯による縦位懸垂文、地文縄文（RL）縦位施文。内面ナデ。Ｄ．片岩粒、赤色粒、白色粒。Ｅ．外－淡黄褐色、内－暗褐色。Ｆ．胴部破片。Ｈ．墳丘内。
7	深	鉢	Ｂ．粘土紐積み上げ。Ｃ．口縁部外面隆帯区画内縄文（LR）施文。内外面ナデ。Ｄ．片岩粒、赤色粒、白色粒。Ｅ．内外－淡褐色。Ｆ．口縁部破片。Ｈ．調査区内。
8	深	鉢	Ｂ．粘土紐積み上げ。Ｃ．胴部外面隆帯文、地文縄文（RL）。内面ミガキ。Ｄ．片岩粒、白色粒。Ｅ．内外－茶褐色。Ｆ．胴部破片。Ｈ．墳丘内。
9	深	鉢	Ｂ．粘土紐積み上げ。Ｃ．胴部外面隆帯による縦位懸垂文、地文縄文（RL）縦位施文。内面ナデ。Ｄ．赤色粒、白色粒。Ｅ．内外－淡黄褐色。Ｆ．胴部破片。Ｈ．石室内。
10	深	鉢	Ｂ．粘土紐積み上げ。Ｃ．胴部外面隆帯による縦位懸垂文、地文縄文（RL）、無文部ミガキ。内面ナデ。Ｄ．黒色粒、白色粒。Ｅ．内外－淡黄白色。Ｆ．胴部破片。Ｈ．調査区内。



第26図　調査区内出土縄文土器（1）

第27図　調査区内出土縄文土器（２）



第28図　調査区内出土縄文土器（3）

11	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による区画文、地文縄文（LR）、無文部ミガキ。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－黄褐色。F．胴部破片。H．埴元内。
12	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による縦位懸垂文、地文縄文（RL）、無文部ミガキ。内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－暗黄褐色。F．胴部破片。H．埴元内。
13	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による縦位懸垂文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．外－明黄褐色、内－暗黄褐色。F．胴部破片。H．調査区内。
14	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による縦位懸垂文、地文縄文（RL）縦位施文。内面ナデ。D．白色粒。E．外－淡黄褐色、内－暗燈褐色。F．胴部破片。H．埴元内。
15	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による縦位懸垂文、地文縄文（RL）縦位施文。無文部ミガキ。内面ナデ。D．白色粒。E．内外－淡褐色。F．胴部破片。H．埴元内。
16	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による縦位懸垂文、地文縄文（RL）縦位施文。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．外－暗茶褐色、内－暗黄茶褐色。F．胴部破片。H．調査区内。
17	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による縦位懸垂文、地文縄文（LR）縦位施文。内面ナデ。D．白色粒。E．外－黄褐色、内－暗燈褐色。F．胴部破片。H．埴元内。
18	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による縦位懸垂文、地文縄文（LR）縦位施文。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－淡茶褐色。F．胴部破片。H．埴元内。
19	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による縦位区画文、地文縄文（RL）、無文部ミガキ。内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．外－淡黄褐色、内－淡黄白色、肉－黒褐色。F．胴部破片。H．埴元内。
20	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による縦位懸垂文、地文縄文（LR）縦位施文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．外－淡茶褐色、内－暗黄褐色。F．胴部破片。H．調査区内。
21	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による縦位懸垂文、地文縄文（RL）縦位施文。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．外－淡黄茶褐色、内－暗褐色。F．胴部破片。H．埴元内。
22	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による区画文、内面ナデ。D．白色粒。E．外－暗燈褐色、内－淡黄褐色、肉－暗灰褐色。F．胴部破片。H．埴元内。
23	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による区画、地文縄文（RL）。内面ミガキ。D．白色粒。E．外－茶褐色、内－暗茶褐色。F．胴部破片。H．調査区内。
24	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による区画文、地文縄文（RL）。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．外－暗黄褐色、内－黒褐色。F．胴部破片。H．埴元内。
25	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面隆帯による一次区画、胴部地文縄文。内面ナデ。D．白色粒。E．外－暗黄褐色、内－暗燈褐色。F．口縁部破片。H．調査区内。
26	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面微隆帯による一次区画、胴部沈線区画内縄文施文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒。E．内外－暗燈褐色。F．口縁部破片。H．埴元内。
27	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面隆帯による一次区画、内面ナデ。D．白色粒。E．外－暗褐色、内－暗黄褐色。F．口縁部破片。H．埴元内。
28	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面沈線による一次区画、胴部地文縄文。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－暗燈褐色。F．口縁部破片。H．埴元内。
29	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面沈線による一次区画、胴部地文縄文（RL）。内面ミガキ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－暗茶褐色。F．口縁部破片。H．埴元内。
30	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面沈線による一次区画、胴部地文縄文（RL）。内面ナデ。D．白色粒。E．外－明茶褐色、内－暗黄褐色。F．口縁部破片。H．埴元内。
31	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面隆帯による一次区画、胴部外面沈線区画内縄文（RL）施文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．外－淡黄褐色、内－暗褐色。F．口縁部破片。G．波状口縁。H．調査区内。
32	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面隆帯による一次区画、胴部外面沈線区画内縄文施文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．白色粒。E．外－暗黄褐色、内－淡黄褐色。F．口縁部破片。G．波状口縁。H．埴元内。
33	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面沈線による一次区画、胴部沈線区画内縄文（LR）施文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．白色粒。E．外－暗黄褐色、内－淡茶褐色。F．口縁部破片。G．波状口縁。H．埴元内。
34	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面沈線による一次区画、胴部地文縄文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．白色粒。E．外－茶褐色、内－暗黄褐色。F．口縁部破片。G．波状口縁。H．埴元内。
35	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面沈線による一次区画、胴部沈線区画文、地文縄文。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－暗茶褐色。F．口縁部破片。G．波状口縁。H．調査区内。
36	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．外面沈線区画文内縄文施文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．白色粒。E．内外－暗黄褐色。F．口縁部破片。G．波状口縁。H．埴元内。
37	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面沈線による一次区画、胴部地文縄文（RL）。内面ナデ。D．白色粒。E．外－暗黄褐色、内－暗燈褐色。F．口縁部破片。G．波状口縁。H．埴元内。
38	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面沈線による一次区画、胴部地文縄文（LR）。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－暗茶褐色。F．口縁部破片。G．波状口縁。H．埴元内。
39	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面沈線による一次区画、胴部地文縄文（LR）。内面ナデ。D．白色粒。E．内外－淡黄褐色。F．口縁部破片。G．波状口縁。H．埴元内。
40	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面沈線による一次区画、胴部地文縄文。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．内外－暗燈褐色。F．口縁部破片。G．波状口縁。H．埴元内。
41	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部・胴部外面とも隆帯による区画文、区画内縄文（RL）、内面ミガキ。D．赤色粒、白色粒。E．内外－暗黄褐色。F．口縁部破片。G．波状口縁。H．埴元内。
42	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面沈線による一次区画、胴部沈線区画文内縄文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒。E．外－暗茶褐色、内－暗黄褐色。F．口縁部破片。G．波状口縁。H．調査区内。
43	深　鉢		B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面沈線による一次区画、波頂部は隆帯により肥厚。胴部縄文（LR）。内面ナデ。D．赤色粒、白色粒。E．外－淡燈褐色、内－淡黄褐色。F．口縁部破片。G．波状口縁。H．埴元内。

44	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．口唇部外面連続刺突文、口縁部外面沈線文、地文縄文．内面ナデ．D．白色粒．E．内外－淡黄褐色．F．口縁部破片．G．波状口縁。内外面とも二次焼成を受けて荒れている．H．埴圧内。
45	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面外面隆帯による一次区画と列点文、胴部外面隆帯による区画文。内面ナデ．D．赤色粒、白色粒．E．内外－淡黄白色．F．口縁部破片．G．波状口縁．H．埴圧内。
46	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．口唇部連続刺突文、外面沈線文、無文部ミガキ。内面ミガキ。D．白色粒．E．内外－暗褐色．F．口縁部破片。G．波状口縁．H．埴圧内。
47	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面隆帯による一次区画と連続刺突文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒．E．内外－暗黄茶褐色．F．口縁部破片．G．波状口縁。H．調査区内。
48	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面沈線による一次区画、胴部沈線区画文、地文縄文（LR）。無文部ミガキ。内面ミガキ。D．片岩粒、白色粒．E．内外－暗茶褐色．F．口縁部把手破片．G．波状口縁。H．埴圧内。
49	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面沈線区画内縄文（LR）施文、無文部ミガキ。内面ミガキ。D．赤色粒、白色粒．E．内外－暗茶褐色．F．胴部破片。G．No50と同一個体。H．埴圧内。
50	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面沈線区画内縄文（LR）縦位施文、無文部ミガキ。内面ミガキ。D．赤色粒、白色粒．E．内外－暗茶褐色．F．胴部破片。G．No49と同一個体。H．埴圧内。
51	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面連続刺突文による一次区画、胴部地文縄文。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒．E．外－淡黄褐色、内－淡燈褐色。F．口縁部破片。H．埴圧内。
52	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面沈線文、地文縄文（RL）、無文部ミガキ。内面ナデ。D．白色粒．E．外－暗灰褐色、内－暗黄褐色。F．胴部破片．H．埴圧内。
53	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面沈線による懸垂文、沈線区画内縄文（RL）縦位施文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．白色粒．E．内外－淡黄白色．F．胴部破片。G．外面斑点状剥落顕著。H．埴圧内。
54	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面沈線による懸垂文、沈線区画内縄文（LR）縦位施文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．白色粒．E．内外－暗黄褐色。F．胴部破片。H．埴圧内。
55	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面沈線区画文内縄文施文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒．E．内外－暗黄褐色。F．胴部破片。H．埴圧内。
56	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面沈線区画文内縄文（LR）施文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．白色粒．E．外－暗茶褐色、内－暗黄褐色。F．胴部破片。H．調査区内。
57	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面沈線区画文内縄文（無節）縦位施文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．赤色粒、白色粒．E．外－暗褐色、内－暗黄褐色。F．胴部破片。H．埴圧内。
58	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面沈線区画文内縄文（LR）施文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．赤色粒、白色粒．E．外－淡黄褐色、内－暗燈褐色。F．胴部破片。H．調査区内。
59	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面沈線区画文、地文縄文（RL）縦位施文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒．E．外－茶褐色、内－暗茶褐色。F．胴部破片。H．埴圧内。
60	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面沈線区画文内縄文（LR）施文、無文部ミガキ。内面不明。D．赤色粒、白色粒．E．内外－茶褐色。F．胴部破片。G．内面剥離顕著。H．埴圧内。
61	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面沈線区画文内縄文（LR）施文、無文部ミガキ。内面ミガキ。D．片岩粒、白色粒．E．外－淡黄褐色。F．胴部破片。H．埴圧内。
62	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面沈線による懸垂文、沈線区画内縄文（RL）縦位施文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．白色粒、小石。E．外－淡茶褐色、内－暗褐色。F．胴部破片。H．埴圧内。
63	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面ナデの後縄文（RL）施文、内面ナデ。D．片岩粒、白色粒．E．外－暗黄茶褐色、内－暗燈褐色。F．胴部破片。H．埴圧内。
64	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面縄文（RL）施文、内面ミガキ。D．片岩粒、白色粒．E．内外－淡茶褐色。F．胴部破片．把手剥離．H．調査区内。
65	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．口縁部外面隆帯による一次区画、胴部外面櫛歯状工具による蛇行条線。内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒．E．内外－暗黄茶褐色。F．口縁部破片．H．埴圧内。
66	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面櫛歯状工具による条線、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒．E．内外－淡黄白色。F．胴部破片。H．調査区内。
67	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面櫛歯状工具による条線、内面ナデ。D．片岩粒、白色粒．E．内外－淡黄褐色。F．胴部破片。H．埴圧内。
68	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面櫛歯状工具による蛇行条線、内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒．E．外－暗茶褐色、内－暗灰褐色。F．胴部破片．H．調査区内。
69	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面ナデの後櫛歯状工具による条線、内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒．E．外－暗褐色、内－燈褐色。F．胴部破片。H．埴圧内。
70	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による懸垂文と半裁竹管による平行線文、内面ナデ。D．赤色粒、白色粒．E．内外－淡黄褐色。F．胴部破片。H．埴圧内。
71	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面隆帯による懸垂文、地文櫛歯状工具による縦位条線。内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒．E．内外－淡黄褐色。F．胴部破片。H．石室内。
72	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面ナデの後櫛歯状工具による条線、内面ナデ。D．片岩粒、白色粒．E．外－明茶褐色、内－暗褐色。F．胴部破片。H．調査区内。
73	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面櫛歯状工具による条線、内面ナデ。D．片岩粒、白色粒．E．外－淡黄褐色、内－暗燈褐色。F．胴部破片。H．埴圧内。
74	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面ナデの後櫛歯状工具による蛇行条線、内面ナデ。D．片岩粒、白色粒．E．外－暗黄茶褐色、内－暗燈褐色。F．胴部破片。H．埴圧内。
75	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面沈線区画文内に刺突による列点文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．片岩粒、赤色粒、白色粒．E．内外－淡黄燈褐色。F．胴部破片。H．調査区内。
76	深	鉢	B．粘土紐積み上げ。C．胴部外面沈線区画内縄文（LR）施文、無文部ミガキ。内面ナデ。D．片岩粒、白色粒．E．内外－暗褐色。F．胴部破片。H．埴圧内。

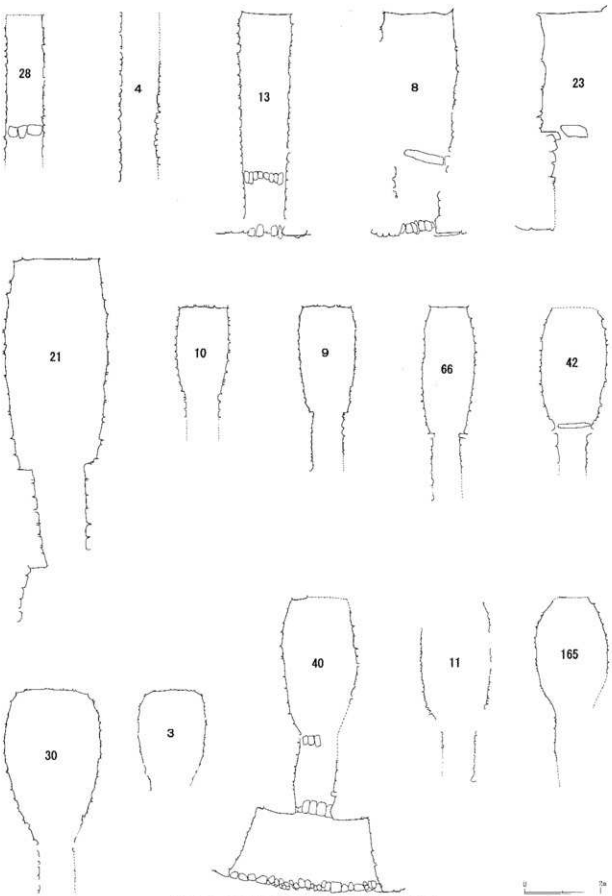
第Ⅴ章　ま　と　め

今回報告した賀家ノ上南地区の長沖172号墳と長沖173号墳は、長沖古墳群の南側を画する小山川(旧身馴川)の河岸段丘壁上に並んで位置している。同じ段丘壁上の南西側約50mには、第４次調査と第５次調査で調査された円墳の長沖27号墳と長沖28号墳が並んで占地しており、これらの古墳の主体部は、長沖27号墳が箱式石棺風の竪穴系礫槨、長沖28号墳が短冊形の袖無型横穴式石室である。長沖172号墳と長沖173号墳については、すでに墳丘が削平されているため不明であるが、時期的には５世紀末～６世紀初頭の長沖173号墳が小規模な竪穴系の礫槨、６世紀前半頃の長沖172号墳が袖無型横穴式石室であったろうと思われる。この段丘壁上の狭い区域に６世紀前半頃までの古墳が集中して築造される傾向が見られることは、当古墳群の形成過程や古墳群内の分割割当(鈴木2007)などを考える上で注目されよう。この段丘壁上に並ぶ４古墳の中で、長沖28号墳からは３条凸帯の円筒埴輪が出土している。この３条凸帯の円筒埴輪は、長沖古墳群のこれまでの調査では、その出土が長沖８号墳・長沖25号墳(菅谷他1986)と長沖32号墳(恋河内・大熊2006)の３基の前方後円墳に限られることから、象徴的な埴輪の一つである可能性も考えられるものであり、長沖28号墳もあるいは前方後円墳かこの河岸段丘壁上に占地するグループの核的古墳であったかもしれない。

中之道地区Ｂ地点の長沖30号墳は、墳形や墳丘規模は不明ながら、主体部が当地域に特有の川原石を使用した模様積みによる胴張横穴式石室の古墳である。長沖古墳群で横穴式石室の形態が分かるものは、現在までのところ15基あり(第29図)、このうち長沖28・４・13号墳が袖無型横穴式石室、長沖23号墳が両袖型長方形横穴式石室、長沖８号墳がやや不鮮明ではあるが、その他が両袖型胴張横穴式石室である。両袖型胴張横穴式石室は、長沖８号墳が緑泥片岩の板石や若干大きめの川原石を使用した乱石風の小口積みである以外は、すべて川原石を使用した模様積みで、長沖８号墳と長沖21号墳は埴輪を伴い、長沖66号墳と長沖165号墳には石室外側の控え積みが見られない。

長沖古墳群における古墳主体部の変遷については、竪穴系の礫槨→袖無型横穴式石室→両袖型横穴式石室に変化し、袖無型横穴式石室は短冊形(長沖28・４号墳)→笏形(長沖13号墳)、両袖型横穴式石室は長方形(長沖23号墳)や川原石乱石積風の胴張形(長沖８号墳)→川原石模様積みの胴張形に推移することが指摘されている(大谷1999)。さらに模様積み胴張横穴式石室は、変化の方向性として石室規模の縮小と形骸化の進行(大谷1999)、石室壁面の構成素材における「大形石材重点だった段階から、乳棒状石材中心の段階への傾斜」(田中1990)などが言われている。模様積み胴張石室の変遷については、埴輪を伴わない時期のものが大半であり、時期が比較的明らかな土器類も石室内出土であれば追葬あるいは盗掘等による墳丘上からの崩落、前庭部出土であれば祖霊信仰等の墓前祭など、古墳築造時に伴うと断定できるものが少ないことなどから、変化の傾向は窺えても出土土器による段階設定は難しい面がある。中々、報告書では図化や十分な記載がされない部分が多く、具体的な検討が困難なものもあるが、やはり石室の変遷を考えるにあたっては、石室の構成用材の変化も含めた構築技法の変化に重点を置くべきであろう。

長沖30号墳の石室は、増田氏が分類された模様積み胴張石室の二系統の形態の中ではＢ－２類に近く(増田1996)、長沖３号墳の石室の平面形態と類似している。玄室部分の下半しか残存していないが、壁面は二列交互重ね積み技法と後込めの版築状の互層(砂礫層と細砂層)によってしっかり作られ、そ



第29図　長沖古墳群の横穴式石室の平面形態

の背面には控え積みを持つ。壁面に見られる模様石(核石)はやや小形化しつつもまだ比較的明瞭で、根石も大形の石材が比較的密に配列されており、玄室の構築用材や構築技法には、要素や技法的欠落が見られるような、石室の形骸化がさほど進行しているとは言えない。出土した鉄鏃が棘関を持つ伸長化した片丸造りの鑿箭式が主体であることからも、本古墳の時期は７世紀前半頃と考えられよう。

＜参考文献＞

大熊　季広　(2003)『長沖古墳群Ⅳ　―第42号墳の調査―』　児玉町文化財調査報告書第37集

(2004)『長沖古墳群Ⅴ　―飯玉地区Ｅ地点の調査―』　児玉町文化財調査報告書第38集

大谷　徹　(1999)『長沖古墳群』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第224集

金子　彰男　(2004)「古墳墳丘下で確認された畝状遺構について」『埼玉考古』第39号　埼玉考古学会

恋河内昭彦　(2008)『長沖古墳群Ⅷ　―久保地区Ｃ地点の調査―』　本庄市遺跡調査会報告書第21集

恋河内昭彦・大熊季広(2006)『長沖古墳群Ⅵ　―第32号墳の調査―』　本庄市埋蔵文化財調査報告書第２集

埼　玉　県　(1980)『新編埼玉県史』資料編１

埼玉県教育委員会　(1994)『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』

塩野　博　(2004)『埼玉の古墳［児玉］』　さきたま出版会

鈴木　徳雄　(2007)「長沖古墳群の形成と共同用益地」『長沖古墳群Ⅶ　―久保地区Ｂ地点の調査―』　本庄市遺跡調査会報告書第14集

鈴木徳雄・尾内俊彦(2007)『長沖古墳群Ⅶ　―久保地区Ｂ地点の調査―』　本庄市遺跡調査会報告書第14集

菅谷　浩之他(1976)『長沖古墳群　―第１次発掘調査―』　児玉町教育委員会

(1977)『長沖古墳群　―第２次発掘調査―』　児玉町教育委員会

(1978)『長沖古墳群　―第３次発掘調査―』　児玉町教育委員会

(1979)『長沖古墳群　―第４次発掘調査―』　児玉町教育委員会

(1980)『長沖古墳群』　児玉町文化財調査報告書第１集

杉崎　茂樹　(1989)「北武蔵の大規模群集墳の消長に関する一考察」『古代』第87号　早稲田大学考古学会

杉山　秀宏　(1988)「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集　第八』　吉川弘文館

関　義則　(1986)「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第３号　古墳文化研究会

田中　広明　(1990)「庚申塚古墳の横穴式石室　―模様積石室と石材の供給(予察)―」『秋山古墳群』児玉町史資料調査報告古代第２集

田中正夫・瀧瀬芳之他(1983)「埼玉における古墳出土遺物の研究　―鉄鏃について―」『研究紀要1983』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

徳山寿樹・大熊季広・西田親史(2002)『長沖古墳群Ⅲ　―村後地区・飯玉地区(Ｃ・Ｄ地点)―』　児玉町文化財調査報告書第36集

利根川章彦　(1994)「東国の群集墳」『古代を考える　東国と大和大権』　吉川弘文館

永井　智教　(2005)「宮内古墳群の提起する問題」『脊戸谷遺跡　―宮内古墳群の調査―』　児玉町遺跡調査会報告書第19集

日高　慎　(1994)「２遺物の概要」『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』　埼玉県教育委員会

増田　逸朗　(1996)「模様積石室小考」『調査研究報告』第９号　埼玉県立さきたま資料館

山崎　武　(1980)「主体部」『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書第１集

写　真　図　版

本庄市マスコット
はにぽん

図版 1

1．長沖古墳群賀家ノ上南地区遠景

2．長沖古墳群賀家ノ上南地区全景

図版２

１．長沖172・173号墳（東より）

２．長沖172・173号墳（西より）

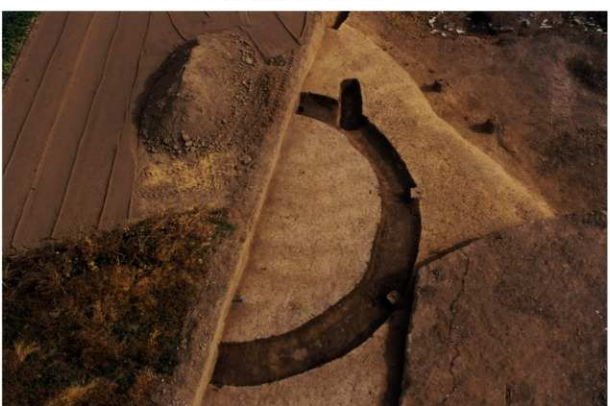
図版３

１．長沖172号墳（東より）

２．長沖172号墳（西より）

図版４

１．長沖173号墳（東より）



２．長沖173号墳（西より）

図版５

１．長沖173号墳遺物出土状態

２．賀家ノ上南地区第１号土坑

図版6

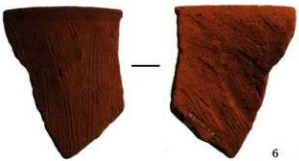
1

2

3

4

5

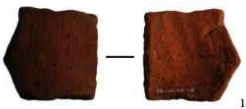

6

7

8

9

10


11

1

長沖172・173号墳出土遺物

図版７

１．長沖古墳群中之道地区Ｂ地点長沖30号墳墳丘伐採風景

２．長沖古墳群中之道地区Ｂ地点長沖30号墳墳丘

1．長沖古墳群中之道地区B地点全景（1）

2．長沖古墳群中之道地区B地点全景（2）

図版９

１．長沖30号墳墳丘盛土堆積状態（１）

２．長沖30号墳墳丘盛土堆積状態（２）

図版 10

1．長沖30号墳石室内土層堆積状態

2．長沖30号墳石室北側墳丘盛土堆積状態

図版 11

1．長沖30号墳石室控積み検出状況

2．長沖30号墳石室控積み

図版 12

1．長沖30号墳石室西側壁控積み

2．長沖30号墳石室奥壁控積み

図版 13

1．長沖30号墳石室（棺床面）

2．長沖30号墳石室（棺床面除去後）

図版 14

1．長沖30号墳石室基底面

2．長沖30号墳石室壁・控積み根石

図版 15

1．長沖30号墳石室掘り方

2．長沖30号墳石室玄門東側門柱石出土状態

図版 16

1．長沖30号墳石室西側壁

2．長沖30号墳石室西側壁（棺床面除去後）

図版 17

1．長沖30号墳石室東側壁

2．長沖30号墳石室東側壁（棺床面除去後）

1．長沖30号墳石室奥壁

2．長沖30号墳石室奥壁（棺床面除去後）

図版 19

1．長沖30号墳石室西側壁二列交互重ね積み状態

2．長沖30号墳石室東側壁二列交互重ね積み状態

図版 20

1．長沖30号墳石室後込め

2．長沖30号墳石室西側壁後込め

図版 21

1．長沖30号墳石室東側壁後込め

2．長沖30号墳石室奥壁後込め

図版 22

1．墳丘上宝篋印塔出土状態（1）

2．墳丘上宝篋印塔出土状態（2）

3．石室撹乱内鐔出土状態（1）

4．石室撹乱内鐔出土状態（2）

5．石室撹乱内寛永通宝出土状態（1）

6．石室撹乱内寛永通宝出土状態（2）

7．石室内須恵器破片出土状態（1）

8．石室内須恵器破片出土状態（2）

図版 23

1．石室内棺床面耳環(金環)出土状態

2．石室内棺床面耳環(銀環)出土状態

3．石室内棺床面耳環(金環)出土状態

4．石室内弓金具出土状態

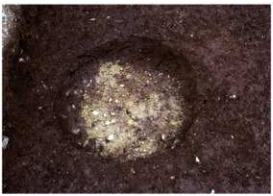
5．石室内棺床面鉄鏃出土状態（1）

6．石室内棺床面鉄鏃出土状態（2）

7．石室内棺床面刀子出土状態（1）

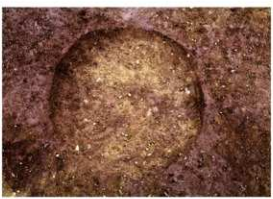
8．石室内棺床面刀子出土状態（2）

図版 24

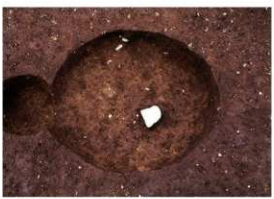


1．第1号土坑

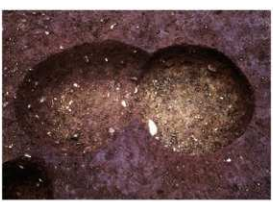
2．第2ａｂ号土坑



3．第3号土坑



4．第4号土坑



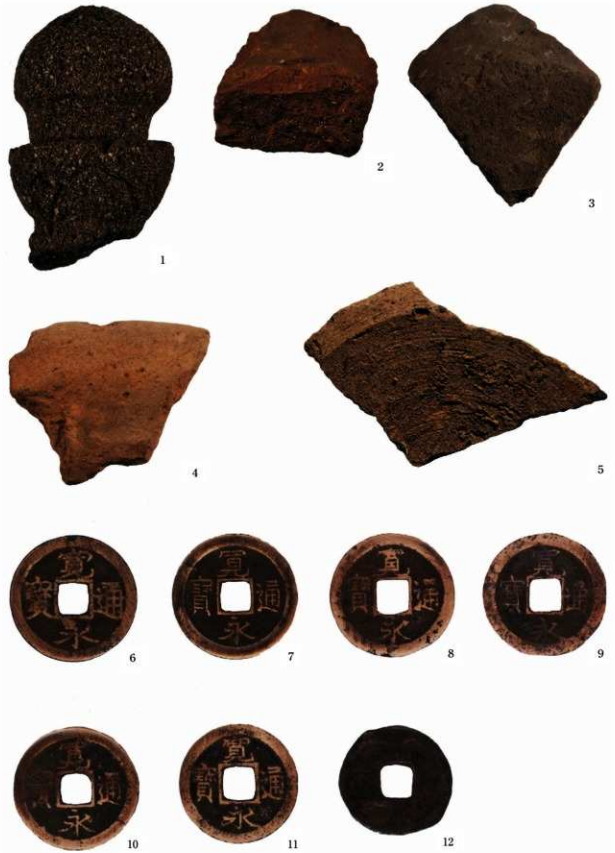
5．第5ａｂ号土坑

6．第6・7号土坑

7．第8号土坑

8．第9号土坑

図版 25



長沖30号墳墳丘撹乱内出土遺物

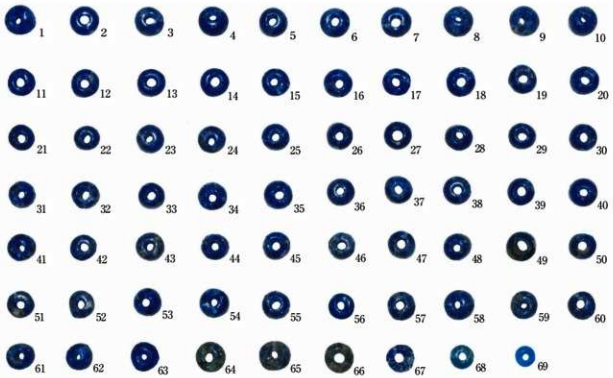
図版 26

長沖30号墳石室内出土金属製品（1）

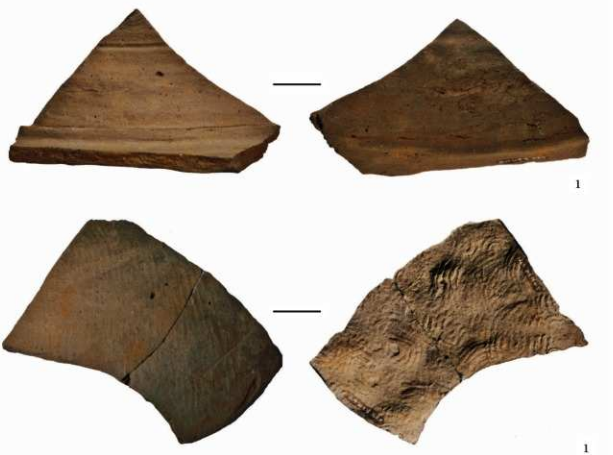
図版 27

長沖30号墳石室内出土金属製品（2）

図版 28

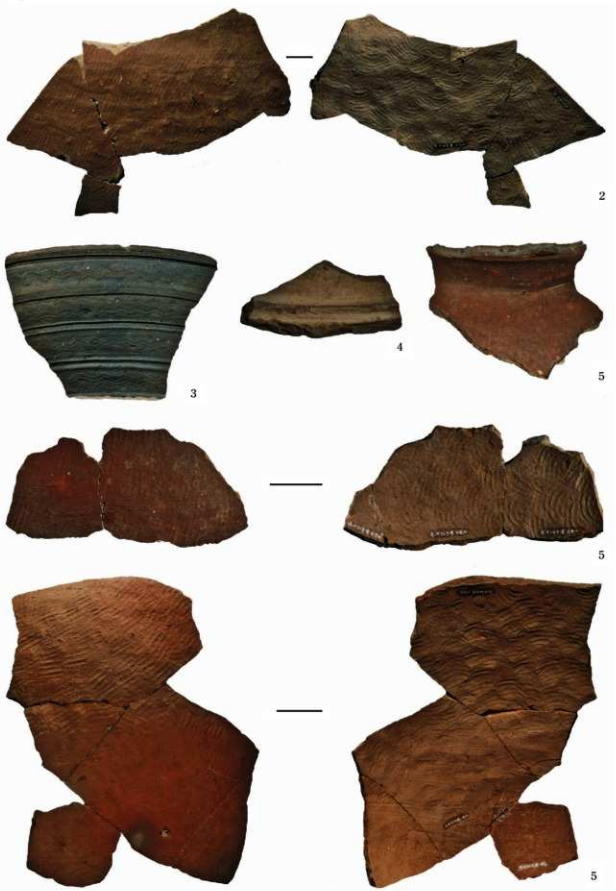


長沖30号墳石室内出土ガラス小玉



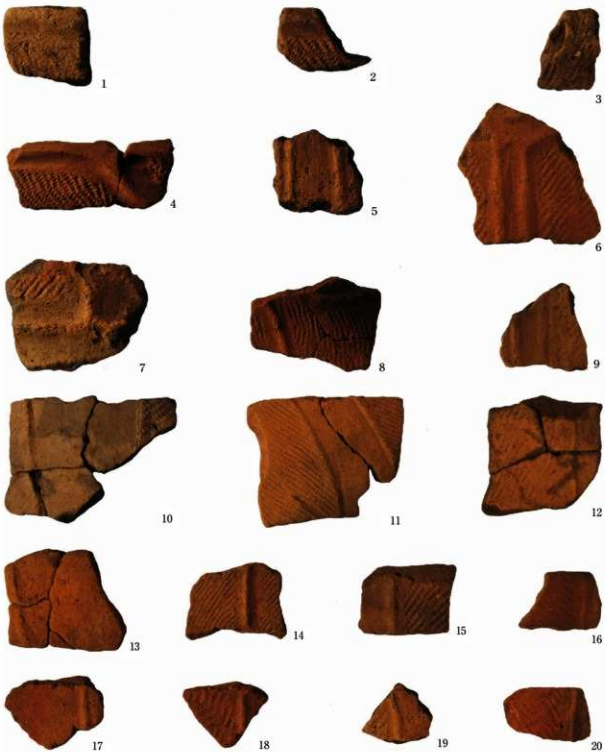
長沖30号墳出土須恵器（1）

図版 29



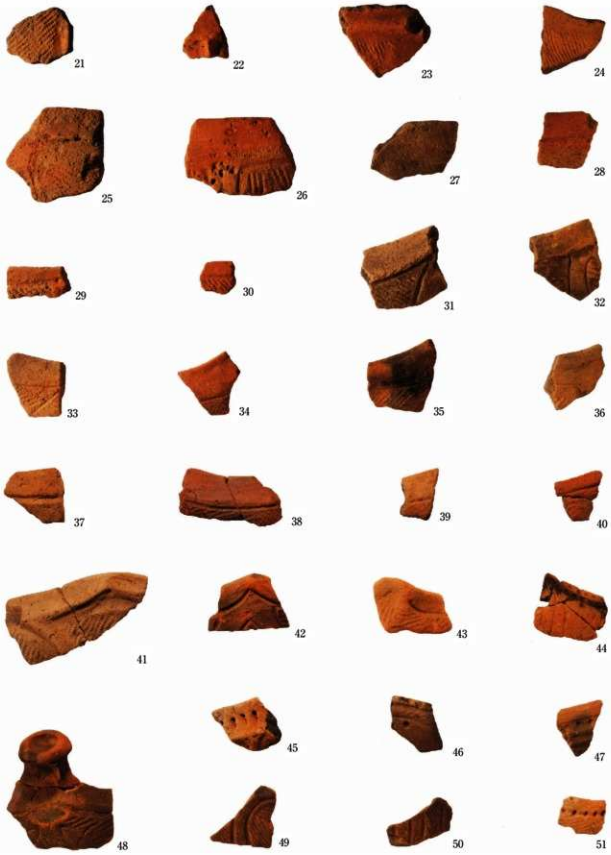
長沖30号墳出土須恵器（2）

土坑出土遺物



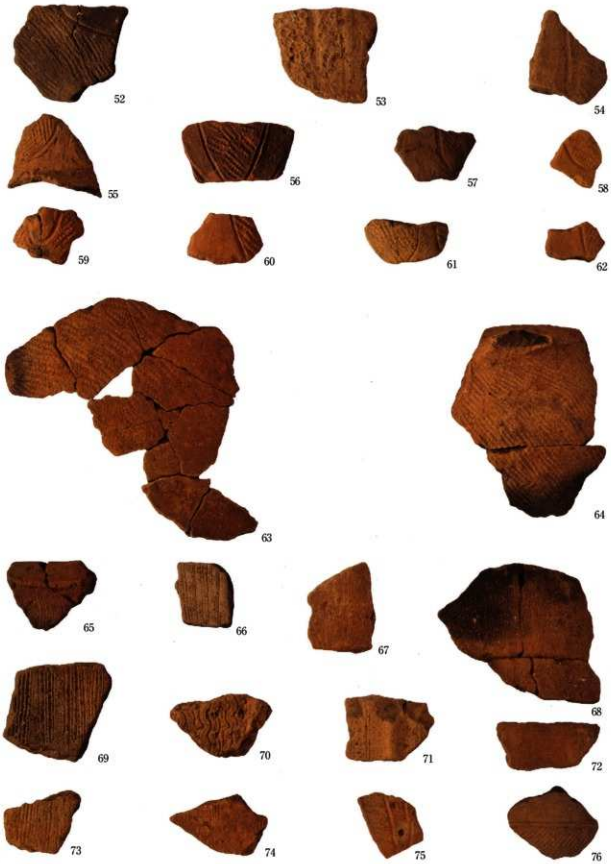
調査区内出土縄文土器（1）

図版 31



調査区内出土縄文土器（2）

図版 32



調査区内出土縄文土器（3）

報 告 書 抄 録

フリガナ	ナガオキコフングンⅨ　―ナガオキ172ゴウフン・ナガオキ173ゴウフン・ナガオキ30ゴウフンノチョウサー		
書名	長沖古墳群Ⅸ　―長沖172号墳・長沖173号墳・長沖30号墳の調査―		
副書名	児玉南土地区画整理事業発掘調査報告書2		
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告書	巻次	第24集
編著者	恋河内昭彦		
編集機関	本庄市教育委員会		
所在地	〒367-8501　埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号　TEL　0495-25-1185		
発行日	西暦2011年（平成23年）3月18日		

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯 （°′″）	東経 （°′″）	調査期間	調査面積	調査原因
長沖古墳群 賀家ノ上南地区	本庄市児玉町児玉字賀家ノ上482番地1 （ほんじょうしこだまちょうこだまあざがけのうえ）	112119	54-300	36° 10′ 42″	139° 8′ 2″	19941011 ～19941209	301㎡	区画整理
長沖古墳群 中之道地区 （B地点）	本庄市児玉町金屋字中之道6番地 （ほんじょうしこだまちょうかなや あざなかのみち）	112119	54-300	36° 11′ 10″	139° 7′ 50″	20060522 ～20060912	270㎡	区画整理

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長沖古墳群 賀家ノ上南地区	古墳	古墳時代	古墳跡2	埴輪、土師器	
		不明	土坑1		
長沖古墳群 中之道地区 （B地点）	集落	縄文時代	土坑8	縄文土器（加曽利EⅢ～Ⅳ式、称名寺式）	
	古墳	古墳時代	古墳1	須恵器甕、鉄鏃、弓金具、鐔、刀子、耳環、ガラス小玉	
		中世		常滑窯製甕、常滑窯製片口鉢、在地産片口鉢	
	祭祀	近世	土坑2	美濃瀬戸系広口壺、寛永通宝、宝篋印塔（相輪）	

本庄市埋蔵文化財調査報告書第24集

長　沖　古　墳　群　Ⅸ

—長沖172号墳・長沖173号墳・長沖30号墳の調査—

児玉南土地区画整理事業発掘調査報告２

平成23年　３月18日　印刷
平成23年　３月18日　発行

発行／本庄市教育委員会
埼玉県本庄市本庄３丁目５番３号

印刷／山進社印刷株式会社
埼玉県本庄市本庄３丁目３番36号